HAL
open science

古代日本文化の鏡を越えて:1930 年の沖縄に関する仏国のシャルル・アグノエルのフィールドワーク調査

Patrick Beillevaire

To cite this version:

Patrick Beillevaire. 古代日本文化の鏡を越えて:1930 年の沖縄に関する仏国のシャルル・アグノエルのフィールドワーク調査. 24e séminaire de recherche sur les îles du Sud, Centre de recherches sur les îles du Sud, Université internationale d'Okinawa 沖縄国際大学　南島文化研究所　第 24 回南島研究セミナー, Centre de recherches sur les îles du Sud, Université internationale d'Okinawa 沖縄国際大学　南島文化研究所, Oct 2012, Ginowan (Okinawa), Japan. ⟨halshs-01964925⟩

HAL Id: halshs-01964925

https://shs.hal.science/halshs-01964925

Submitted on 24 Dec 2018

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

沖縄国際大学総合研究機構　南島文化研究所

第 24 回南島研セミナー

古代日本文化の鏡を越えて

～1930 年の沖縄に関する仏国のシャルル・アグノエルのフィールドワーク調査～

【概要】

1930 年、後のソルボンヌ大学の教授で、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究院の創設者であるシャルル・アグノエルが、東京の日仏会館の研究員であったこの時期、民俗学および言語学的調査を行うため沖縄へ赴いた。彼は南島談話会に集まった民俗学者たち、とりわけ伊波普猷と親交を持ち、自らのフィールドワークノート上で彼らの論文を頻繁に参照している。

しかしながら、彼のアプローチは日本の民俗学者のそれよりも体系的で、日本文化とはやや別個に沖縄文化の特性を考慮する傾向が窺える。本発表は、シャルル・アグノエルが沖縄から持ち帰ったノートやクロッキーの豊かさをあらゆる角度から紹介することを目指す。

講師：**パトリック・ベイヴェール氏**

（フランス科学研究庁　社会科学高等研究院・日本研究所教授）

日時：2012 年 10 月 29 日（月）　16 時 30 分～

会場：沖縄国際大学　13 号館 3 階　301 教室

～参加無料・申込不要～

「古代日本文化の鏡を越えて　1930年の沖縄に関する仏国のシャルル・アグノエルのフィールドワーク調査」

パトリック・ベイヴェール
Patrick Beillevaire
フランス国立科学研究センター（CNRS）

沖縄国際大学　南島文化研究所

第24回南島研究セミナー

2012年10月29日

― 古代日本文化の鏡を越えて　1930 年の沖縄に関する仏国のシャルル・アグノエルのフィールドワーク調査 ―

1930 年、後のソルボンヌ大学の教授で、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究院の創設者であるシャルル・アグノエルが、東京の日仏会館の研究員であったこの時期、民俗学および言語学的調査を行うため沖縄へ赴いた。彼は南島談話会に集まった民俗学者たち、とりわけ伊波普猷と親交を持ち、自らのフィールドワークノート上で彼らの論文を頻繁に参照している。しかしながら、彼のアプローチは日本の民俗学者のそれよりも体系的で、日本文化とはやや別個に沖縄文化の特性を考慮する傾向が窺える。本発表は、シャルル・アグノエルが沖縄から持ち帰ったノートやクロッキーの豊かさをあらゆる角度から紹介することを目指す。

- Au-delà du miroir de la culture du Japon ancien : l'enquête de terrain de Charles Haguenauer à Okinawa en 1930 -

Futur professeur à la Sorbonne, fondateur de l'Institut des hautes études japonaises du Collège de France, Charles Haguenauer (1896-1976) se rend à Okinawa durant l'année 1930, alors qu'il est pensionnaire à la Maison franco-japonaise de Tokyo, pour y mener une enquête ethnologique et linguistique. Il était alors en relation avec les folkloristes rassemblés à Tokyo dans le *Nantō-danwakai* (Groupe de recherche sur les îles du Sud), en particulier avec Iha Fuyū, originaire d'Okinawa, et on trouve de fréquentes références à leurs travaux dans ses notes de terrain. Cependant, son approche est plus systématique que la leur et elle tend aussi à considérer, plus qu'ils ne le font, l'originalité de la culture d'Okinawa indépendamment de celle du Japon. Cette conférence se propose de présenter toute la richesse des notes et des croquis que Charles Haguenauer a rapportés d'Okinawa.

(*Cf. Okinawa 1930. Notes ethnographiques de Charles Haguenauer. Éditées et commentées par Patrick Beillevaire*. Paris, Collège de France, Institut des hautes études japonaises, 2010, xii-312 p.).

古代日本文化の鏡を超えて

－1930年の沖縄に関する仏国のシャルル・アグノエルのフィールドワーク調査－

1896年にノルマンディーに生まれたシャルル・アグノエルは、中国研究者のマルセル・グラネーとアンリ・マスペロ、インド学者のシルヴァン・レヴィー、言語学者のアントアヌ・メイェ、そして民族学者のマルセル・モースといった、錚々（そうそう）たる先生の指導のもとで学びました。アグノエルは後にソルボンヌ大学の教授、そしてコレージュ・ド・フランス日本学高等研究院の創設者となり、1976年パリで死亡しました。彼はフランスにおける現代日本学の父、あるいは祖父のようなものであると言うことができるでしょう。

アグノエルが遂行した研究領域は、非常に広範囲の分野や地域にわたっています。彼は、言語学者であったと同時に、民族学者、考古学者でもあり、奈良時代、平安時代の文学から、朝鮮やアイヌ、台湾のアタヤル族の民俗文化に至るまで、さまざまなテーマの研究をしました。その広範な研究対象地域の中でも特に琉球諸島は、1925年から32年まで、作家で駐日大使を務めたポール・クローデルと渋沢栄一によって創立された東京の日仏会館の研究員であった時期、民俗学、言語学、歴史学の観点からアグノエルの関心を強く引いたことはよく知られています。

周知の通り、当時琉球諸島に関する研究は、日本民俗学の二大研究家、折口信夫と柳田國男によって進められ大いに発展しました。二人とも現地調査を行い、特に柳田國男と彼が主宰（しゅさい）する南島談話会や、『炉辺叢書』シリーズ刊行を中心に、本土出身または沖縄出身の研究者が多く集まりました。アグノエルは彼等の何人かと個人的に知り合いになり、とりわけ1925年から東京に在住した伊波普猷と友人関係を持ちます。アグノエルが1930年の春に沖縄へ調査に赴く際、これら日本の民俗学者たちの著書によって、彼の知的関心が大いにそそられていたであろうことは想像に難（かた）くありません。伊波、柳田、折口の名前はアグノエルのノートの中に何度か出て来ます。柳田國男の『海南小記』は二度言及されています。

アグノエルが沖縄で取った記録は、七冊のノートブックに収められていますが、その内の一冊は小さい手帳サイズで、『旅行記』と題されています。このノートブックの最初の12ページには、沖縄に関する様々な情報、主に民間伝承や歴史についての本の題名、歴史的出来事、琉球語の発音に関する注意事項、あるいは連絡を取る予定であった人物の名前が書かれています。このことからも明らかなように、彼

は沖縄滞在の準備に十分時間を費やしたと思われます。旅行に持参した書物については明確に記されていませんが、彼が確かに持参したと思われる本は、言語学者バジル・ホール・チェンバレンの 1895 年に刊行された『日琉語比較文典』であります。現地調査中頻繁にこの本を紐解（ひもと）き、間違いを訂正したり不足を補ったりしたようです。また、彼はいわゆるガイドブックも持って来たようで、これは 1922 年に再版された親泊朝擢の『沖縄案内』である可能性が高いと思われます。

アグノエルは 1930 年 3 月 1 日、大阪で台南丸に乗船し、名瀬を経て 3 月 4 日に那覇に上陸しました。沖縄に 40 日間滞在した後、4 月 12 日に同じ船で那覇を離れます。泊まった宿の名前は記されていませんが、港地区の西新町の南陽旅館であると思われます。その理由は、彼の『旅行記』にこの名前が二度出てくること、それと同時に、アグノエルの情報提供者の一人であったその旅館の主人、太田朝敷の名前も記されているからです。ご存知の通り、太田朝敷は、前年の 1929 年に『琉球新報』の社長となり、また首里の市長に任命された沖縄の重要人物です。太田は 1920 年に、記者活動での困難に立ち向かうためにその旅館を開業しています。

アグノエルは、びっしり詰まった日程を立てたおかげで、沖縄本島のほぼ全域を回ることができました。漁村糸満を八度訪れ、名護、今帰仁、国頭地方の北まで足を伸ばし、島の東側と西側に点々とする町村に寄るという十日間の長旅（ながたび）も実施しました。また、琉球王国の神聖情の礎となる知念と玉城の海岸地方へも行き、そこで四日間滞在しました。調査は沖縄本島のみで実施し、久高島以外は離島も先島も訪れませんでした。

アグノエルが持ち帰った七冊のノートブックうちの一冊は、先ほどお話しました『旅行記』と題されたノートブックで、実際には少ししか使われませんでした。その中に日記のようなものも書いてありますが、残念ながら詳細ではなく、主に一般的な情報や書誌情報、他のノートブックを補充するさまざまな民俗学的情報などが記されています。五冊のノートブックは訪れた主要な場所の名前、『糸満』、『玉城・知念・久高』、『今帰仁・辺土名』、『瀬嵩・名護・恩納』、『首里』がタイトルになっています。しかし、『首里』ノートブックには、那覇の遊郭である辻町についての情報も載っていて、アグノエルが辻遊郭での散歩や舞踊の観劇を気に入っていたことが窺えます。実際、彼は滞在中三度も劇場に行きました。また、『旅行記』用ノートブックにはその舞踊の演題を記入しています。辻町とジュリウマの起源、前の遊郭についても調査しました。最後の一冊には　約二十の集落で集めた

語彙や、音声学に関する注が記されています。

アグノエルは沖縄にカメラを持って来ています。彼が持ち帰った写真が28枚コレージュ・ド・フランスに保存されていますが、ノートの中には　保存されている以外の写真が少数参照されています。欠けた写真は紛失したか、あるいは失敗した写真であったのかも知れません。また、コレージュ・ド・フランスに保存されている写真の中の２、３枚は、購入したものであることが確認されています。

アグノエルのフィールドノートに記されている文章や言葉は、150 以上の多様な大きさのスケッチや図と切り離すことができません。アグノエルに素描家の才能もあったことは、奥武山公園から眺めた那覇市を描いたデッサンから窺い知ることができます。ノートの編集過程で出遭（であ）った困難を詳しく述べることは本発表ではしませんが、たとえば、挿入（そうにゅう）や加筆、反復、矢印などが文章の流れを遮り、時にノートの解読がかなり難しくなる、さらに電報文のように省略された文体に加え、簡単な漢字の速記体のような記述が頻繁に使われている、といったことです。

アグノエルは、ノートに書き留めた琉球語を訳す際に、日本語を最も多く使っており、漢字やローマ字を混ぜて表記しています。彼は言語学のしっかりした素養を身につけていましたので、琉球語の言葉の音声をアクセント記号付きのアルファベットで非常に正確に書き写しています。

驚くほどのことではないのですが、民俗学者によくあるように、アグノエルは祭祀や儀礼とそれに関連する神話と伝説に興味を持っていました。一つには、農作業に密接に関係した年中行事について、本土の農村文化を良く知っていたことも大いに役立って、およそ 10 カ所の集落の年中行事の日程を詳細に書き留めました。もう一つには、出産、誕生、結婚、そして死亡に関する儀礼、習慣や諺、または祖先の生成過程についてで、これに関する記述も多く見受けられます。彼は特に死人の取り扱い、マブイワカシと洗骨という慣習、死後 3 年から 7 年に行われる作業について関心があり、その問題をひとつひとつ検討しています。さらに、入れ墨、ハジチといった風習についても、あちこちでさまざまな老人に詳しい質問をしています。また、集落外婚に関する馬デマ（ンマディマ）という習慣や、女性のヤガマヤーや若者のモーアシビ（毛遊び）に非常に興味を持ちました。

アグノエルが八回も訪問した糸満での調査の例を挙げますと、年中行事、門中組織、墓とアジシの制度、誕生と葬送の儀礼、結婚の方式、男性と女性の髪結いのこ

と、ハジチ、つまり女性が手にする入れ墨の方法や起源伝説、漁業、特に漁法や魚の商業、そして家庭経済についても記述があります。また、糸満特有の風習に関する調査として、白銀堂とトゥチヤの祭、ノロが唱える祈願と雨乞い、ハーリー（爬龍船）、そして建築儀礼に関する歌等があります。糸満では特別綿密に調査を行い、旧村長・玉城ゴウロウの『糸満町志』と題される手書きの文書からも多くの情報を得ます。もちろん、他の集落での調査は糸満での調査ほど詳細にわたっていません。

これらの儀礼と習慣の多くは現在廃れており、「村史」などのなかに記憶としてしか書き残されていないため、現地調査で書き記されたアグノエルの記述は疑いも無く価値があるといえます。そのほか、先ほど触れましたハーリー（爬龍船）や糸満の白銀堂の祭り、国頭村のウンジャミ、久高島のイザイホー、辻遊郭のジュリ馬祭り、弥勒行事など、有名な祭りについても情報が収集されています。

祭り、儀礼や習慣と並行して、宗教組織、つまり祭司の多様な職、名称やその順序、また、ノロが祭る神とノロ職の継承規則を巡って、幾つかの集落で調査を行いました。ノートの記述の端から端まで、女性の霊的優越が明白でありながらも、その霊的優越の礎とされる「おなり神」、すなわち姉妹の霊力の概念は触れられていません。実は、伊波普猷と柳田国男も、当時この概念をまだ強調していませんでした。また基本的に、海の彼方に位置する神国、すなわち「ニライカナイ」の概念も触れられていません。

アグノエルの書くことによれば、首里で彼は二人の女祭司に会いました。彼女たちは、琉球王国滅亡後も 50 年間、王国の高級な祭司職を続けました。一人はおよそ 67 歳、キコエオオギミ（聞得大君）であり、もう一人は富里ママツと称する 77 歳の女性で、ミドゥンチ（三殿内）で、ウフシュビ（大主部）または大アムシラレとも言われる資格で祭式を執り行っていました。三殿内というのは、当時首里の旧三平等（ミヒラ）に対応する三つのドゥンチ（殿内）が合併した結果の名称であります。三殿内での祭壇、つまり神棚の配置に関して、アグノエルのノートに詳しい図があります。多分その場所は前のシュンドゥンチ（Šundunči, Shuri-dunči）と同じ場所でした。富里ママツの伝記について、ノートには次のような簡単な注釈があります。まず富里さんのお姉さん、座喜味カメさんという女性はミドゥンチの担当者でありました。しかし彼女が病気になったため、未亡人で子供も無い富里さんが座喜味さんの後を引き継ぎました。座喜味さんの前任者は王国政府に任命されたベン（保栄茂）ウシという女性でした。

アグノエルは沖縄本島各地の複数の集落で、ノロやカミンチュ（神人）と面会し

ました。彼は会話の初めに話し相手の名前と年齢を記録することを習慣にしていました。こうして、祭祀に関して、糸満の 77 歳の玉城ゴゼイ、久手賢の 68 歳の山口マーカ、今泊の仲尾次（なかおし）、名護城の平良カマドゥ、辺土名の 31 歳の宮城カマドゥ、田港の 72 歳の當山ウシ、瀬嵩のウクディ、70 歳の金城カマドゥらと次々に面談しました。首里や糸満やその他の集落では　ユタとも会談しました。アグノエルは、首里の旧鳥掘区、鳥小掘(トゥンジュムイ)と言う区のユタ、54 歳の玉城ウターの生涯の話をかなり細かくノートに書き綴っています。

アグノエルが出会った人の中でも、とりわけ現在でも名前の知られているのは、歴史家の真境名安興と民俗学者の島袋源一郎です。島袋源一郎は北部への長旅に際して運転手と案内役を務めました。彼が編集した 1919 年の『国頭郡志』は、ノートのなかで幾度も参照されています。真境名安興とアグノエルはおそらく何度か会っていて、アグノエルは知念半島を訪れた時、真境名が貸したその地方に関する本を持参しています。知念村では、村長や民俗学者の新垣孫一と長時間対談しました。新垣さんは、以前折口信夫が沖縄で調査をした際の情報提供者でもありました。

どこの村落でもアグノエルは歓迎を受けました。大抵は、村長あるいは役人、地元の郷土史愛好家の教師がアグノエルを迎え入れ、彼を高齢の住民に紹介したと思われます。糸満の例を挙げると、村長大城（グスク）英彦が彼を迎えました。例外として、富里字で非常に感じの悪い地方公務員に会ったというエピソードがあります。その人物像をこのように描写しました：「あの人はまったく不愉快で、うそつきで、うぬぼれた公務員であります」。

恐らく紹介状を持っていたであろうアグノエルは、尚泰王の四男、尚順男爵を沖縄滞在の初めに訪問しています。首里城近くの尚順邸宅のテラスを見るとプロヴァンスを少し連想したと、アグノエルは綴（つづ）っています。男爵邸にはその後少なくとも四度訪れ、琉球王国旧首都の習慣や言葉について長時間にわたって歓談しました。その際、男爵邸にある見事な蔵書の写本、例えば四冊の『琉球国由来記』などを閲覧する機会があったようです。この本は、1673 年に終わった知念半島や久高島への国王の行幸〔ぎょうこう〕にも言及しています。

『琉球新報』の筆頭株主で、県の銀行と経済を掌握した尚順男爵の勢力は当時衰退の一途（いっと）を辿っていましたが、彼は洗練された人物で、美術や花を愛好し、学芸を保護しました。アグノエルは『旅行記』のノートブックの端に、「香水を製造する為のバラの花の目録、パリの眺望の写真集、老舗（ろうほ）専門店のカ

タログ、出来ればカラーで、化粧洗面具または香水」を男爵に送るのを忘れないように、とメモしています。

アグノエルは尚男爵の蔵書を閲覧する以外に、県立図書館や糸満役所の図書室にも通いました。そのほか、彼は那覇西本町にあった新嘉喜書店に少なくとも一度訪れました。知念調査に関して、彼は県立図書館で喜瀬貫喬（きせかんきょう）、もしくは喜長（きちょう）の『我が村玉城村』と言う本を調べました。そこに古代や近世の参考文献を見つけ、自分のノートに題名を書き記したり、また抜粋を書き写したりしました。宮古島へ行くことはできませんでしたが、慶世村恒任（きよむらこうにん）が 1927 年に出版した『宮古史伝』で、島の結婚と葬式の風習に関する文献を集めることができました。しかし、アグノエルのノートで最も多くのページ（約１０ページ）が割（さ）かれているのは、伊波普猷と真境名安興が 1919 年に出版した『沖縄女性史』です。これは、アグノエルが知念、玉城と久高への調査に行った時に持参した本で、この書物の中でアグノエルは、王国時代の女性の宗教的役割、結婚、村落内婚、さらに中国語の資料についての情報を得ています。

アグノエルのノートは、その時代の沖縄についての証言とも言うべき価値を有する資料であると思います。彼は政治・経済問題には殆ど注意を払いませんでしたが、その一方で、近代文明と相容れないとされる習慣や風習を、警察が圧力をかけて根絶しようとしていることを三度にわたって記しています。警察は墓を散在して作ることを住民に禁じ、墓地の使用を義務づけ、またモーアシビを禁じています。モーアシビとは、夜、集落の男女の若者が野原などに集まって遊ぶ祭りの風習です、その時、性的関係が結ばれることもありましたが、多くはその後の結婚で正式な関係になりました。これについて「当局の禁止にもかかわらず祭りの風習は続いている」とアグノエルは書いており、若者たちは、「警察やその密告者（スパイ）を物ともしない」などと歌っている、とも記しています。

アグノエルの記述は、当時の沖縄社会の実態を写真よりも雄弁に物語っています。例えばこのような文章があります：「学校に行きながら子供達は日本語のレッスンを説明するために、方言を使います」、または「西欧風で趣味のよい服装をした者は手に自分の靴を持ち、素足（すあし）で歩きます」、または辻町で「風俗の女性たちの肉のような風貌を見ると、その光景にアグノエルは吐き気（はきけ）を催した」と記しています。

フィルドワークノートによくある様に、調査の際の状況によって、時には主題から外（はず）れたり、横道にそれたりすることも　ありました。そのような理由で、

ノートを編集するにあたって、通読を容易にするために、所々でテーマのつながりを持続させるようにする必要がありました。しかし、アグノエルの記録は、その基盤となる研究者としての視点の正確さと質に支えられて、一貫性があると同時に綿密な内容を提供しており、戦前沖縄の村民文化の真の俯瞰図（ふかんず）であるといえるでしょう。戦前の村民文化を物語る資料の大部分は、戦中・戦後の混乱期に紛失したり、博物館の奥底（おくそこ）に埋もれたりしてしまいました。アグノエルのノートに収められた民俗学的、言語学的資料は、沖縄専門の研究者にとって、どのページにもコメントを添えたくなるほどの魅力に溢（あふ）れています。

沖縄から帰った後、アグノエルは琉球について七本の論文や書評を執筆しました。また、1956 年に出版された未完の大作『日本文明の起源』には、人類学的、民族学的、言語学的な視点から、琉球諸島に触れている箇所があります。しかし、現地調査で得た成果を直接著した研究論文は、1954 年に『フランス極東学院紀要』に掲載された「死の表象の特徴」という短い論文と、『日本文明の起源』の中の「埋葬習慣」に関する数ページの文章の二つだけです。その二つの論文の中で、彼の狙いは、「個人の死によって沖縄本島の村民に生じる集団反応を理解すること」と述べており、主として糸満の例について論じました。そのほか、『日仏会館紀要』や『アジア協会誌』においても琉球についての論文を発表しましたが、『隋書』にある琉球国の描写やゴレスの問題、琉球王国の貿易・外交など、民族学的記述が時折あるとはいえ、取り扱われていることは古代史や近世史に関する問題でした。ゴレスの問題については、既に『旅行記』に書き留めていた、歴史家・秋山謙蔵の三本の論文を自分の論文内で詳しく検証しています。したがって、これらアグノエルが出版した論文を通読するだけでは、彼の沖縄調査ノートの持つ豊かさのごく一部しか伺い知ることができません。本発表の意図はとりもなおさず（取りも直さず）、私が数年かかって編集したアグノエルのノート、そして彼の沖縄滞在の概要を皆様に紹介することにありました。

結論といたしまして、なぜこの発表のタイトルに「古代日本文化の鏡を越えて」と言う言葉を使ったのか申します。まず、明らかにアグノエルは、「古代日本文化を映した沖縄文化」という歴史観に基づいた従来の研究に満足せず、現地沖縄に出向き自分自身の目で見ました。次に、「沖縄は文化的見地からいって日本の一つの構成要素であるが、その特性は古代日本文化、あるいは大和文化の範囲に限られない」という、伊波普猷と同じ考え方に立っていると思います。さらに、アグノエル

の現地調査方法は、とりわけその体系性と全体論的アプローチ、すなわちホリスチックなアプローチからして、日本民俗学、日本フォルコローレよりヨーロッパの民族学（エスノロジー）の調査方法に近いと思います。彼は日本の民俗学とは異なる理論的枠（わく）の中に沖縄文化を置きます。

彼は、戦後に発表した論文の中で、ヘルツとモースの影響から、誕生と死に関する儀礼的過程を比較対照しています。簡単に説明しますと、誕生と死の両方において次の五段階を観察します：第一に、瀕死（ひんし）の人と産婦を日常生活から隔離（かくり）する。第二に、近親者が騒音、騒ぎとも言う、を立てることによって魔神や悪い影響を遠ざける。第三に、死者はこの世を放棄し、新生児はこの世に溶け込む（とけこむ）。第四に、死者と産婦の家族は家に籠る。第五に、死者と産婦の親族を日常生活に戻すため一連の儀礼があり、死者と新生児においては、段階的なノーマリゼーションを経験する。また、アグノエルは洗骨について、「洗骨から後、死者は静かな良い祖先であり、ノロの祈願によって彼の子孫と村民に豊穣をもたらすことができる」と観察しています。

以上、私の考察をもって、本日の発表を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

パトリック・ベイヴェール、パリ、2012 年 10 月 19 日

およそ70歳

Charles HAGUENAUER

シャルル・アグノエル

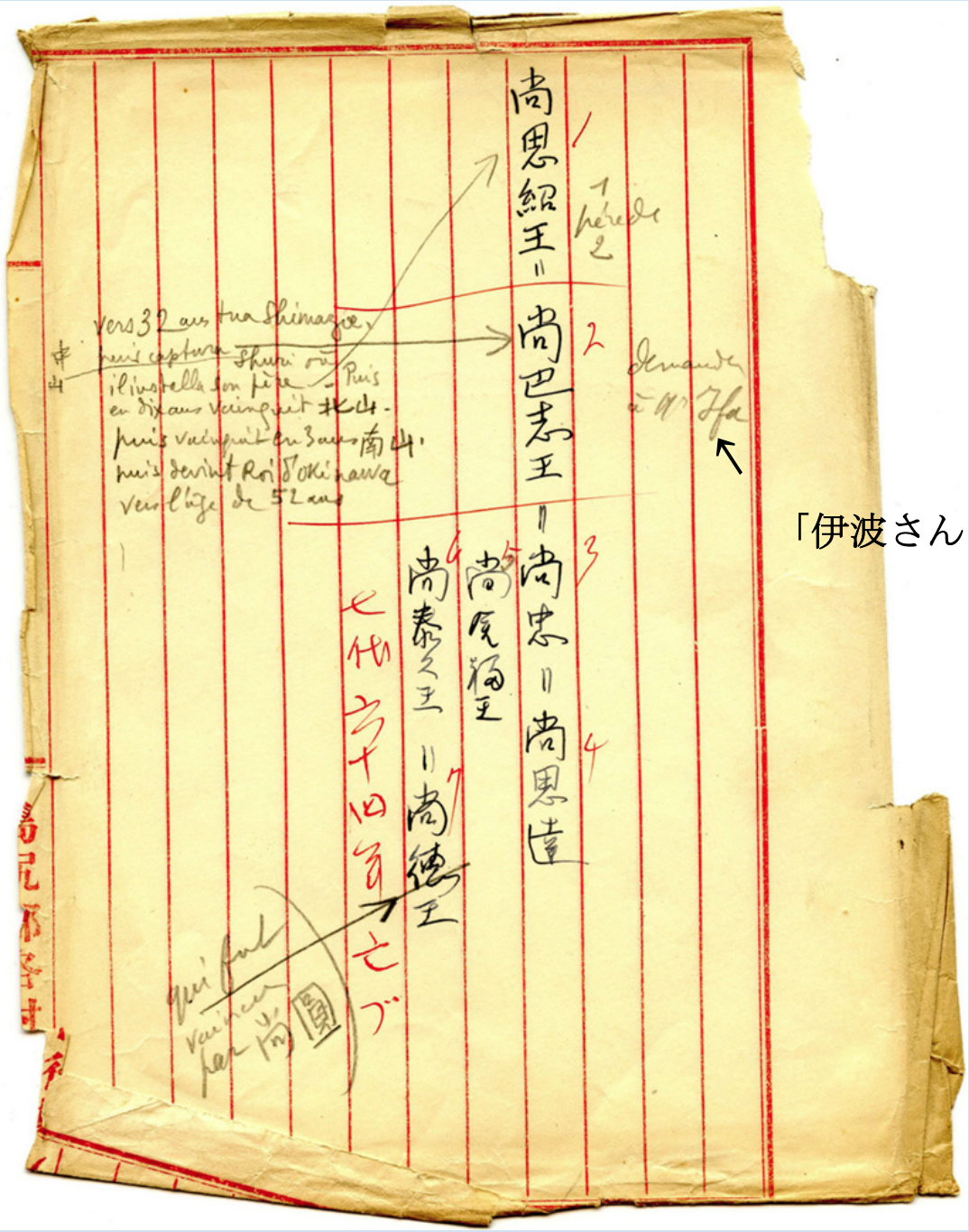
1896年：ノルマンディー 地方のカーン市で生まれ

1925年-1932年：東京日仏会館の研究員

1953年-1969年：ソルボンヌ大学教授、日本語と日本文化講座

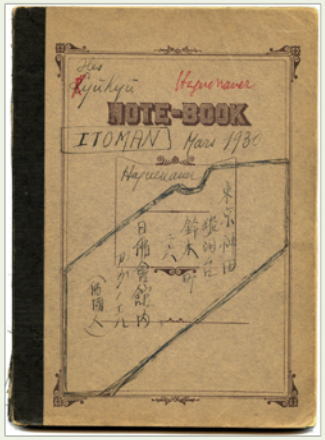
1959年：日本学高等研究院を創設し（1973年にコレージュ・ド・フランス附属研究院になる）

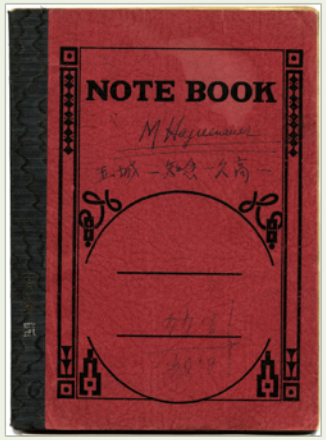
1976年：パリで死亡

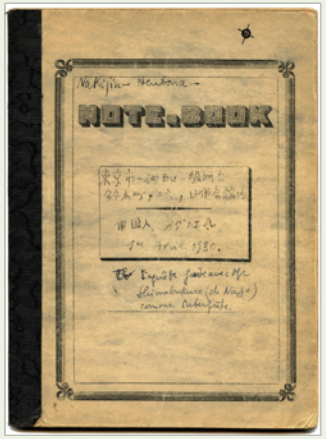

尚思紹王
尚巴志王
尚忠
尚思達
尚泰久王
尚徳王
尚円王
尚宣威王
尚泰侯記
東恩納寛惇
Demander à M. Ifa
Demander à M. Ifa

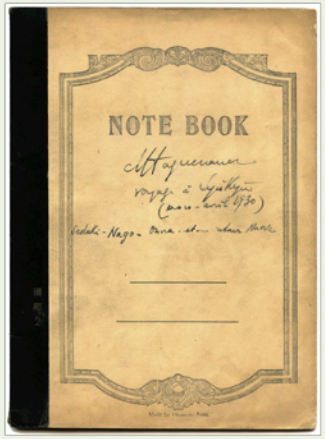
「伊波さんに聞くこと」

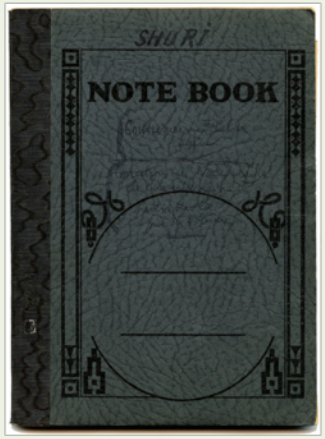
「旅行記」
の手帳





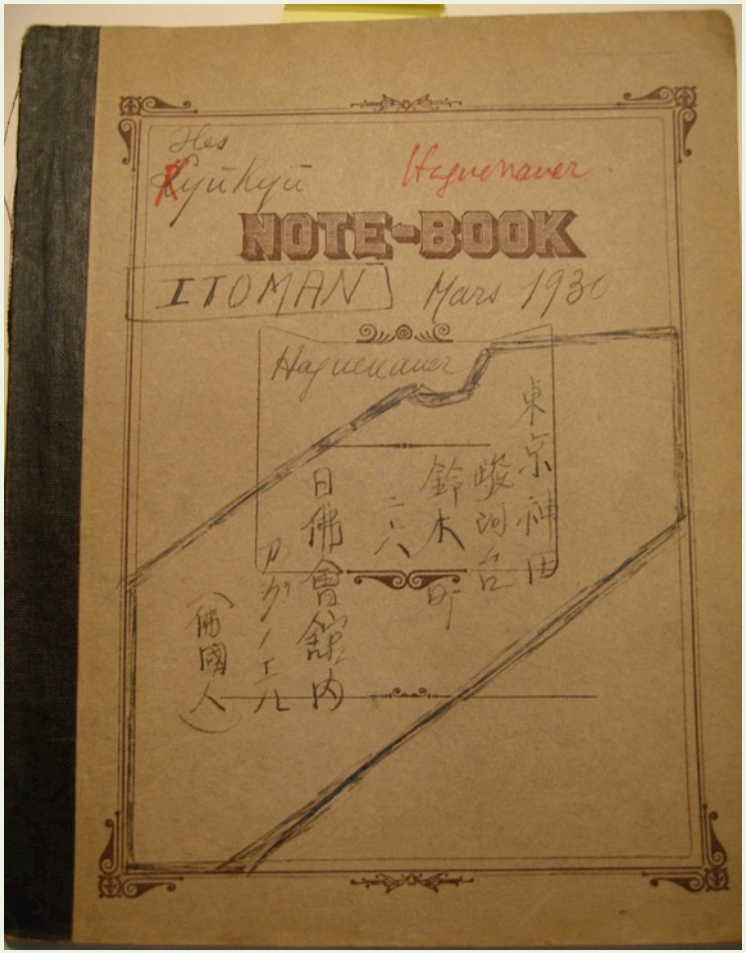






シャルル・アグノエル
の７冊のノートブック

「旅行記」
の手帳

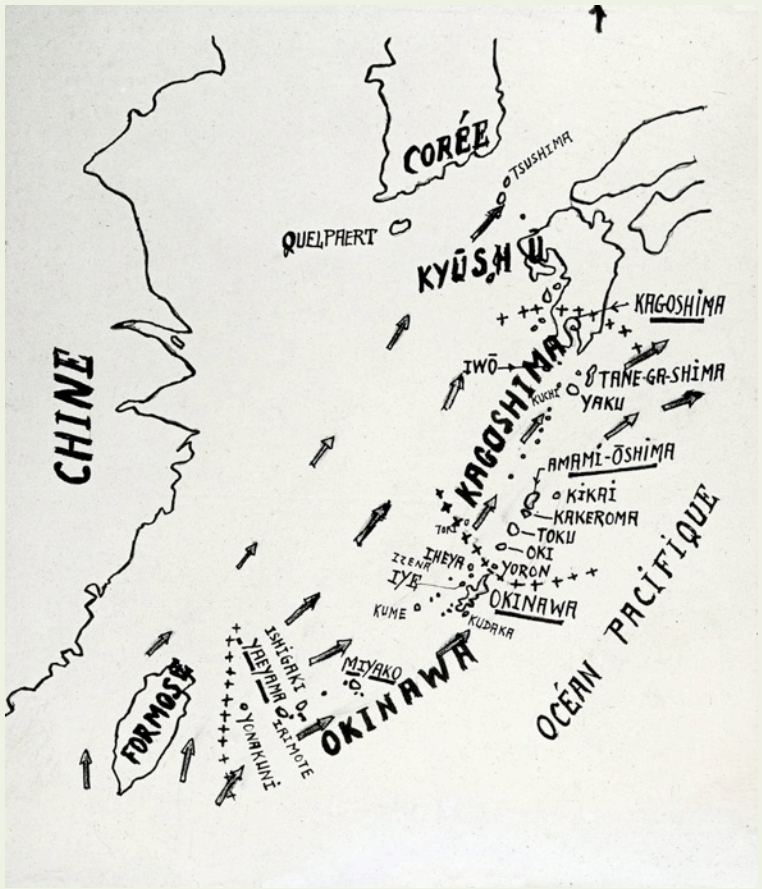


1930年、沖縄滞在の日程と主な行動

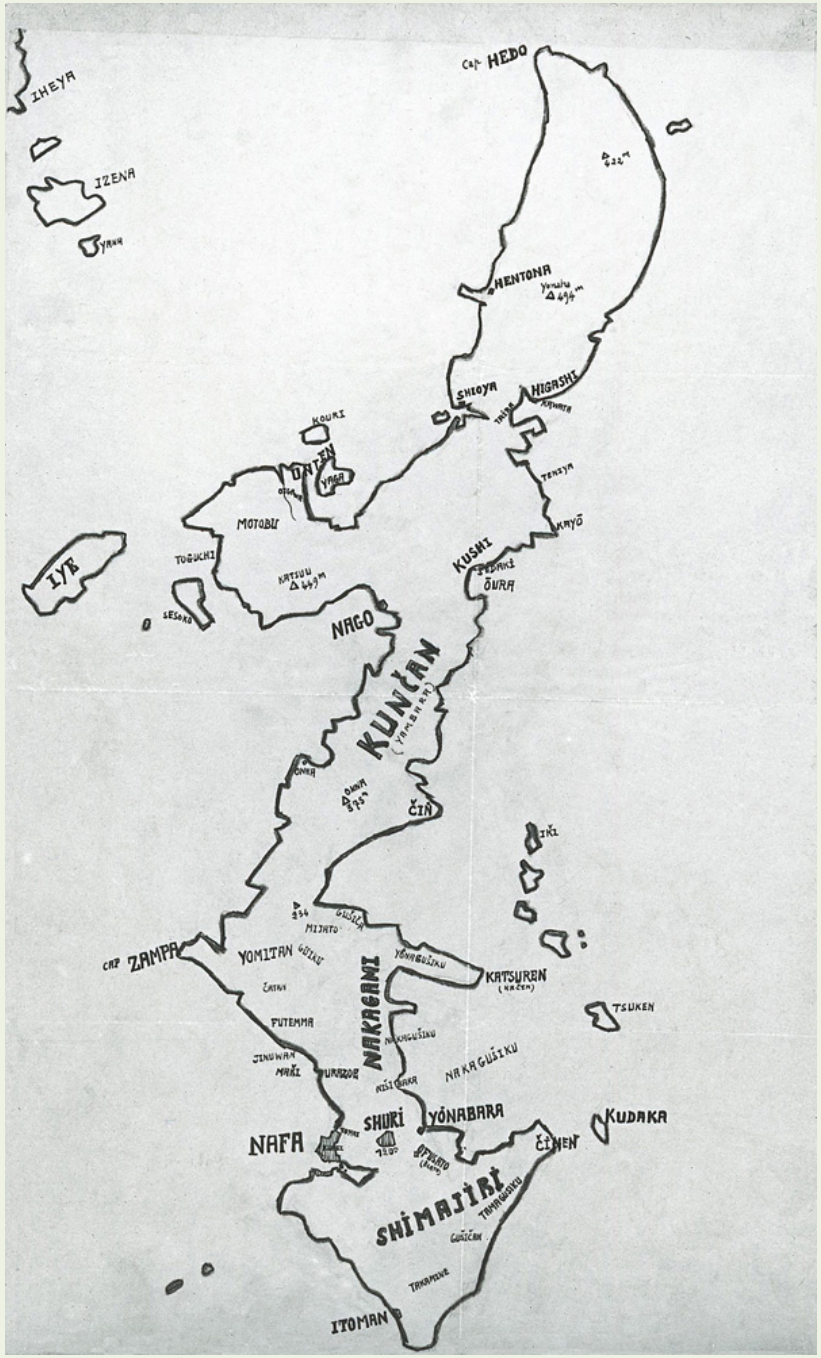
3月1日：大阪で台南丸に乗込む
3月3日：名瀬に寄港
3月4日：那覇に上陸
3月5日：首里にて尚順家を訪問、ある百名氏との出会い
3月6日：病気のため部屋に籠る
3月7日：糸満での調査開始
3月8日：那覇に滞在、波の上宮を見学。夕方、辻町の劇場に行く
3月9日：糸満に行く
3月10日：那覇に滞在
3月11日-15日：糸満で調査を続ける
3月16日-17日：那覇でジュリ馬祭を見学
3月18日：糸満での調査最後の日
3月19日：首里にて市長の太田朝敷と出会う。尚家の図書室で勉強
3月20日：劇場の夕べ
3月22日：玉城へ出発
3月23日：富里に戻り、知念へ出発
3月25日：斎場御嶽を見学、久高島へ渡る
3月26日：与那原に戻り、大里を経て那覇に鉄道で帰る
3月27日：首里にて尚家を訪問。琉球語や盆踊りに関して首里出身の76歳の比嘉氏と会話。夕方劇場に行く
3月28日：首里にて尚家を訪問。三殿内、首里城、ユタとの会話
3月29日：首里に(？)老人やユタとの会話
3月30日：那覇に滞在
3月31日：那覇に滞在
4月1日：島袋源一郎の車で名護へ出発。運天、今帰仁まで行く
4月2日：運天、今泊、中曽根氏の家に泊まる
4月3日：大宜味村の祭り、辺土名へ
4月4日：東村、天仁屋、嘉陽、汀間
4月5日：久志、瀬嵩
4月6日：名護
4月7日-10日：名護、恩納、金武、読谷
4月10日：那覇に戻る
4月11日：首里へ最後の訪問
4月12日：台南丸で大阪へ出発

シャルル・アグノエルが
訪れた場所

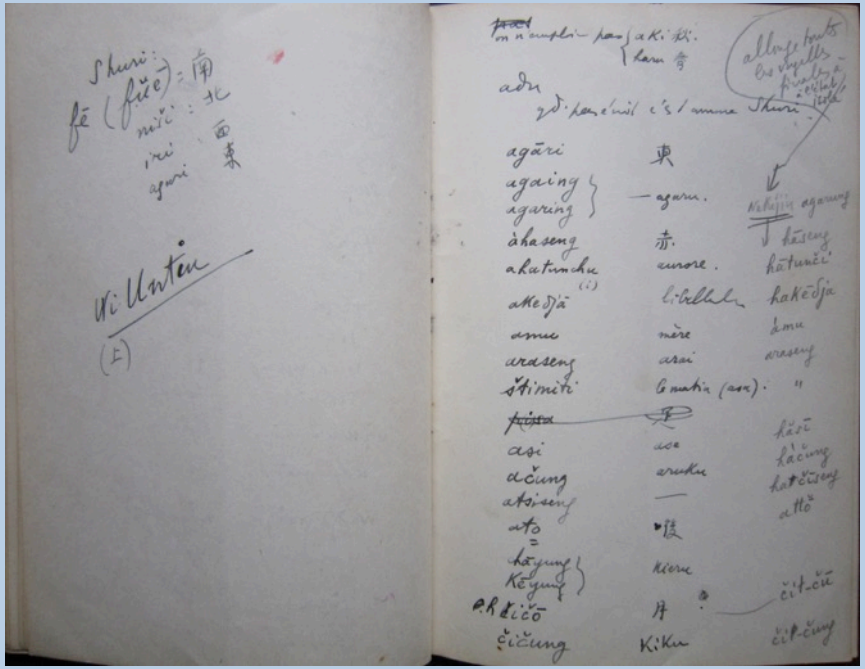
シャルル・アグノエルによって描かれた地図



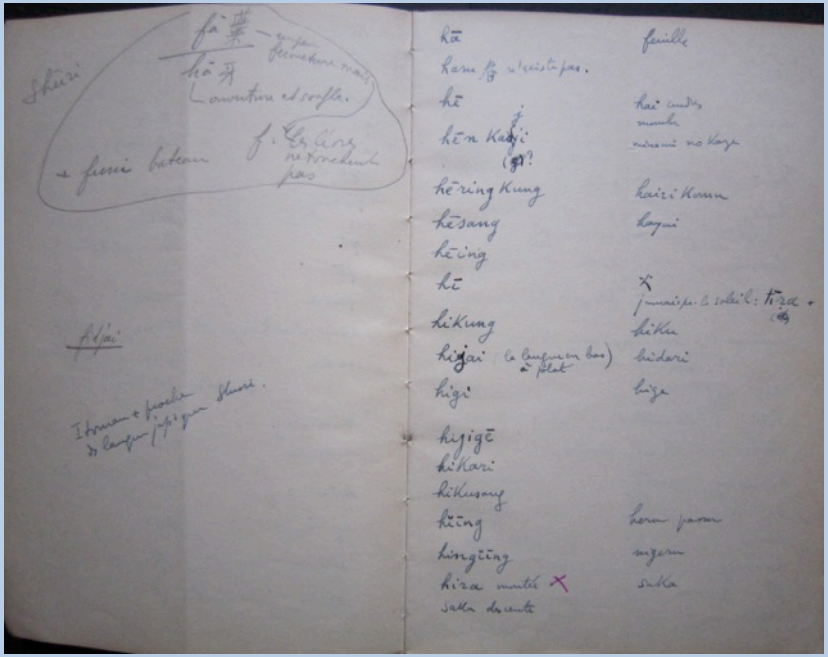
黒潮暖流



アグノエルが訪れた各地の語彙一覧表

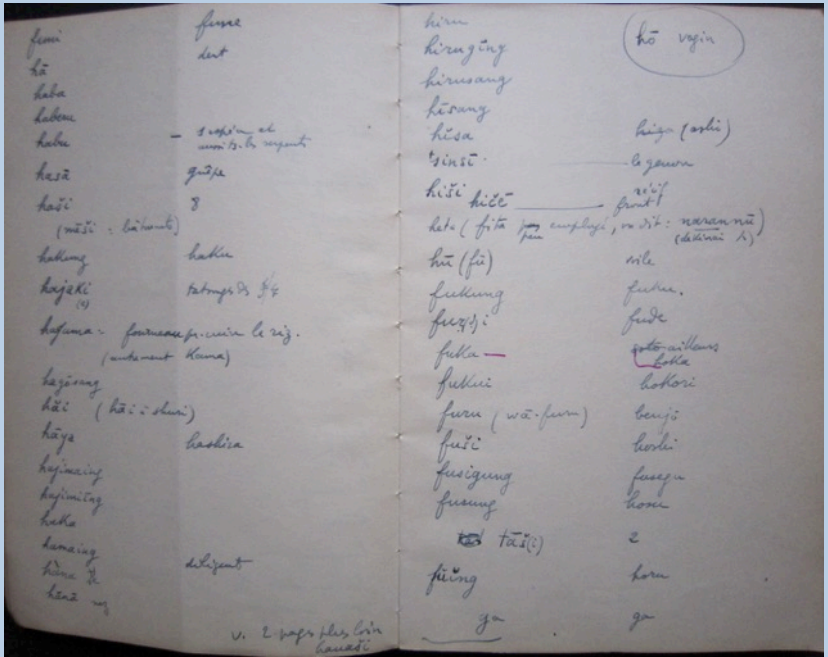


agāri	東	
againg / agaring	— agaru.	
àhaseng	赤.	
ahatumchu (i)	aurore.	
akedjä	libellule	
amu	mère	
araseng	arsi	
šimiti	la matin (aux).	
~~[illegible]~~		
asi	ase	
ačung	arukku	
atoiseng	—	
atto	陵	
kōyung / Kōyung	kiru	
čičō	月	
čičung	Kiku	



kā	feuille	
kē		
kēn Kaji		
kēring Kung		
kēsang		
kēing		
kī		
kikung		
kigai		
kigi		
kigigē		
kikari		
kikusang		
kīng		
kingčing		
kiza		

ābaku	aux
dēzi	
šim(i)ti(i)	
aking	
aru	
yakā	
agari	
ai, aikō	
Senmusama	
ami	
ām(u)	
pišu	
anani	
akking	
atišang	
ava	
ūfū	
chā	
chaku	

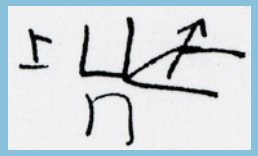


fumi		
kā		
kaba		
kabu		
kasā		
kaši		
kaking		
kajaki		
kajisang		
kāi		
kāya		
kajimeing		
kajimiting		
kake		
kamaing		
kāna		
kānā		
kirisang		
kīsang		
kīsa		
kiši kičē		
kato		
kū (fū)		
fukung		
fuzi		
fukka		
fukui		
furu		
fuči		
fusigung		
fusung		
tāši(i)		
fūng		
ga		

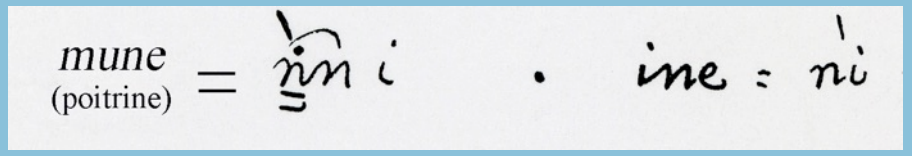
	Yomitan		Yomitan	
suna	šind		fama	hāmā
iši	iši		fā	hā
fē	fē		fā	hā
fē	.		dū	.
fū	.		Kī	.
nča	.		tsuna	čind
ču	tu h	ču	šiča, šitā	šiba
čū	tū	čū	Kuči	.
ačā	atā	ačā	tsumi	čimi
čačā	tātā	tāri (nobl.)	tuppē	čumpē
		čačā (ŦK)	fuyung	fu-ing
štimiti	sutumiti		mmā	
gajang	.		māmū	māmū
wā	.		mū	.
sunčung 3/	fičung		šung, sung	čung ŦK
uganung	.		Kūmu	Kūmū
ting	.		Kōbui	Kūbā
Kadji	.		nnū (nūdāni)	.
Kūzā	.		i yā	.
wāng	wāng		mmū	.
ītī, īči	Kumui, īči		īmi	imi
hatalki	.		(i) yū	iyū
.	.		uyung	u-ing
izana	.		wūyung	wū-ing
tani	sani		uying	u-ing.
nuyung	"			

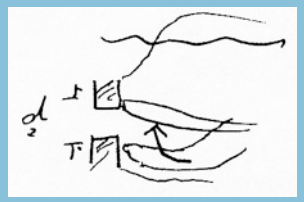
IGE (idji)		
abā	hāma	
yakumū	Kama	
aru	hā	
akā, akasang	hwā	
ačung	dū	
arasang	Kī	
atsisang	sunā	
ammā	šičā	
.	.	
an, ayung. (neg.)	.	
yā	čimpē	
KaKīng	fu-ing	
Kami	.	
Kabi	momi	
Kubi	mū	
.	čūung	
.	.	
.	Kūbā	
Kiūng	.	
.	īyā	
čimu	.	
čing	.	
čiung	.	
čiūng	{uyung, uing	
.		
.		

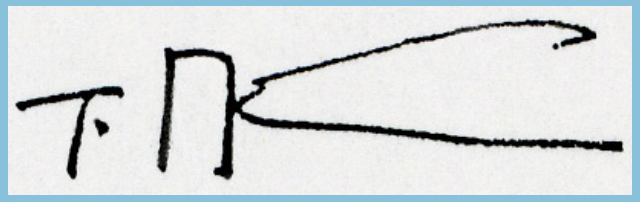
i u marque ya a yui est different.
ūsu
adjimu
hiza
.
.
furu
.
Kā
Kā, činggā
.
.
hē
hidjai
nidjiri
~~nidj~~ nidjuk)
.
.
mi-ung, ~~ning~~
īni
.
.
māču
.
.
.
tīzā

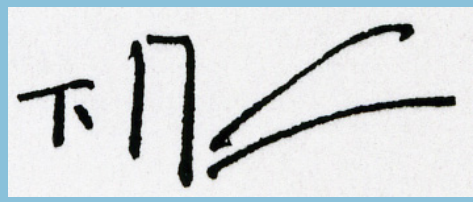


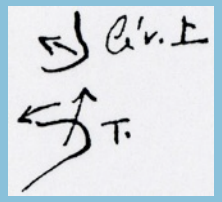
様々な発音図・音声学の図

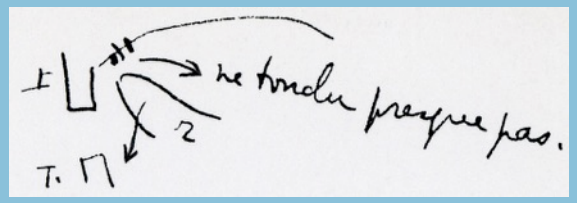


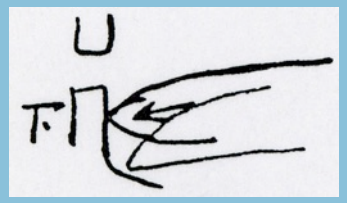


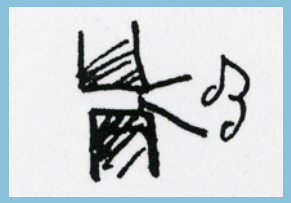


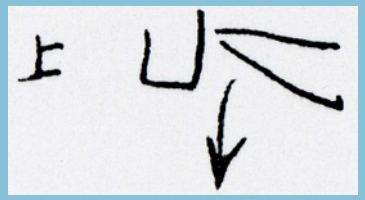


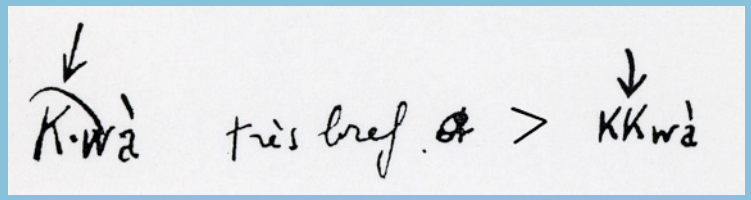


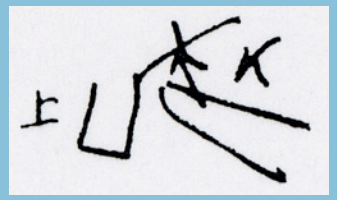


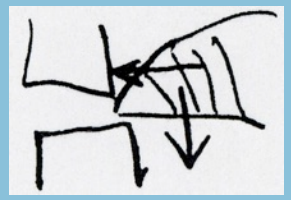


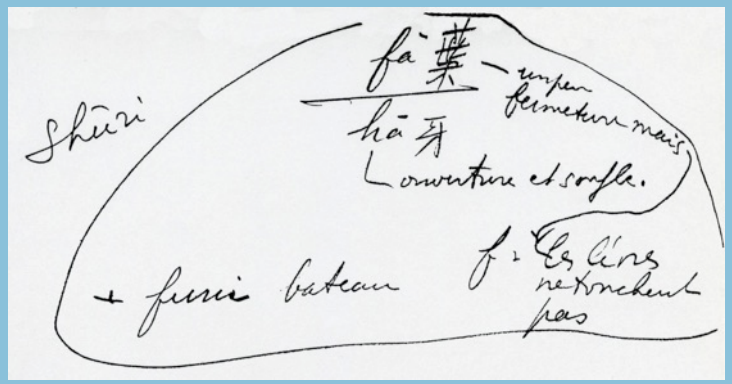




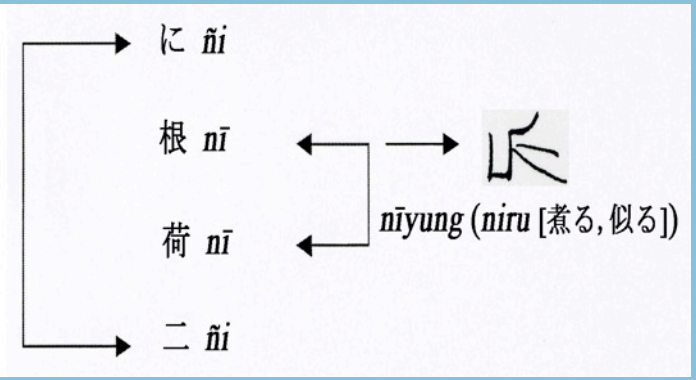








チェンバレンが
区別しなかった
Pas distingué par Chamberlain



波の上宮

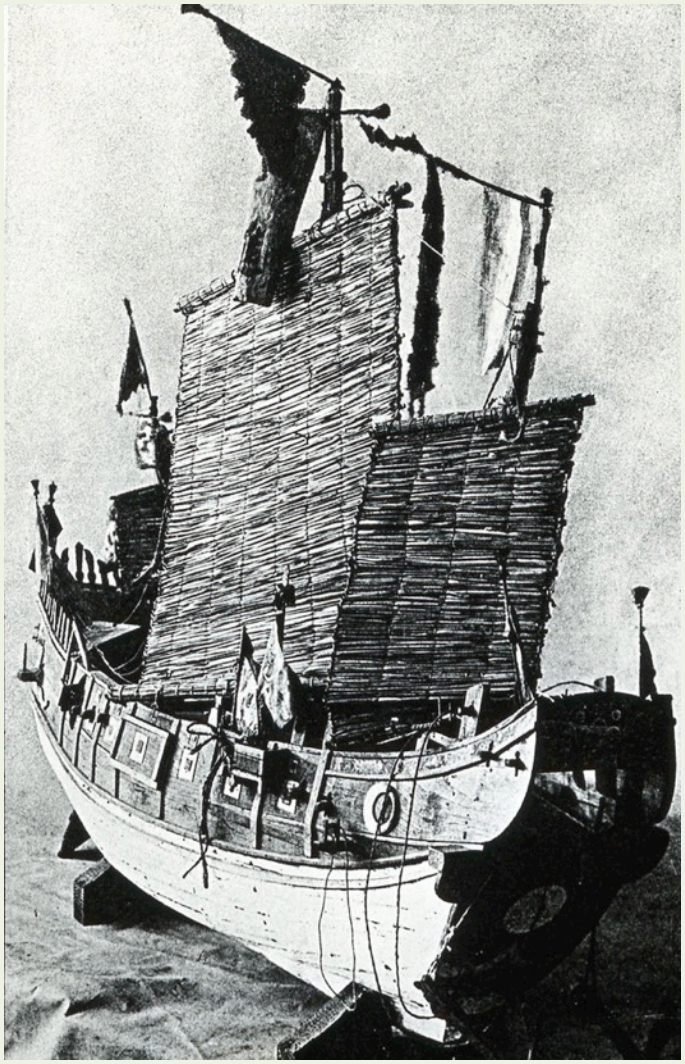
首里城

正殿

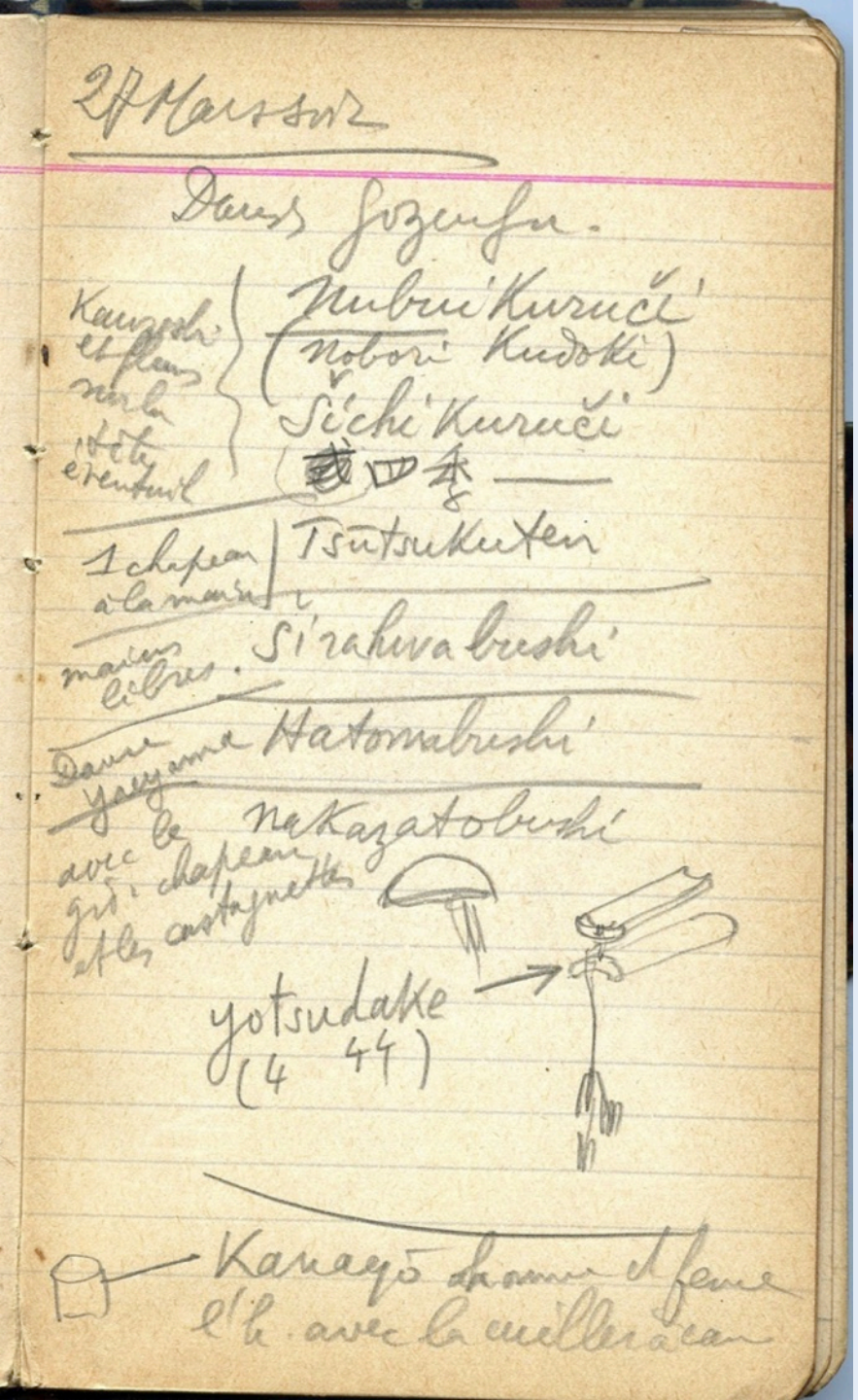
歓会門

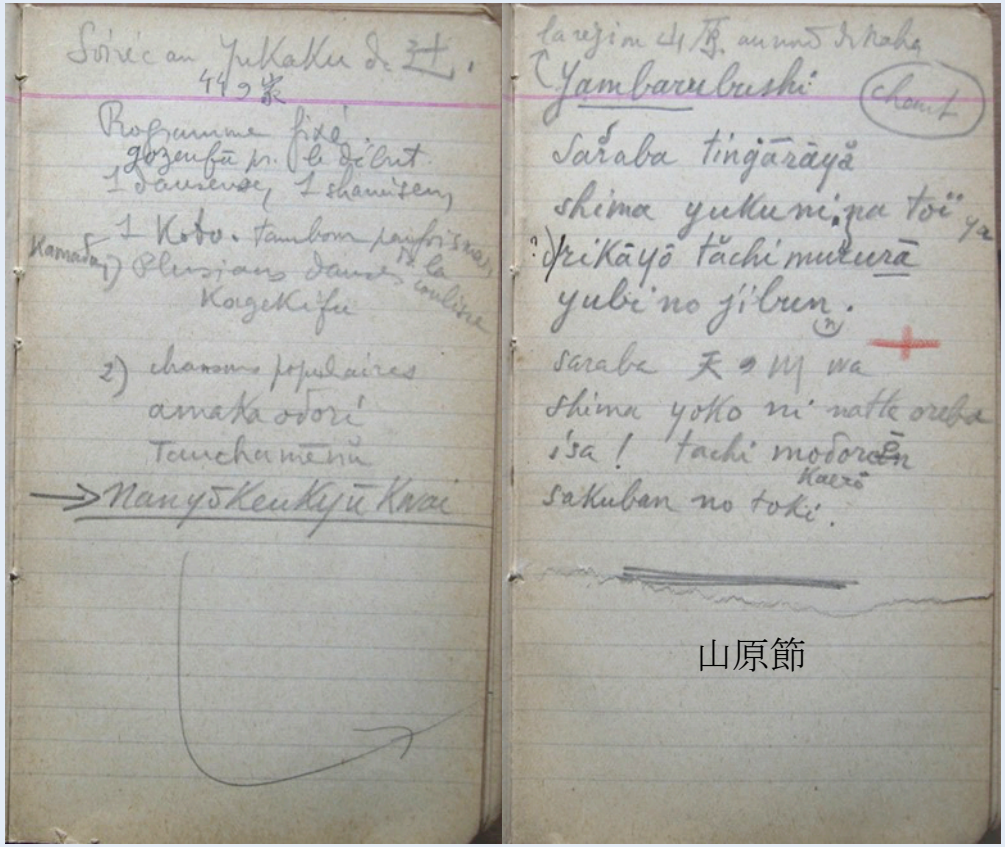
首里三箇の酒屋

購入した写真

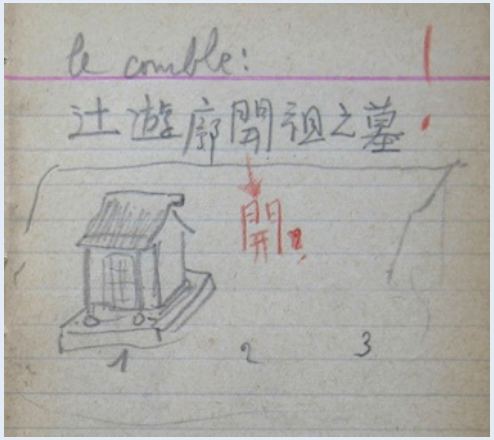


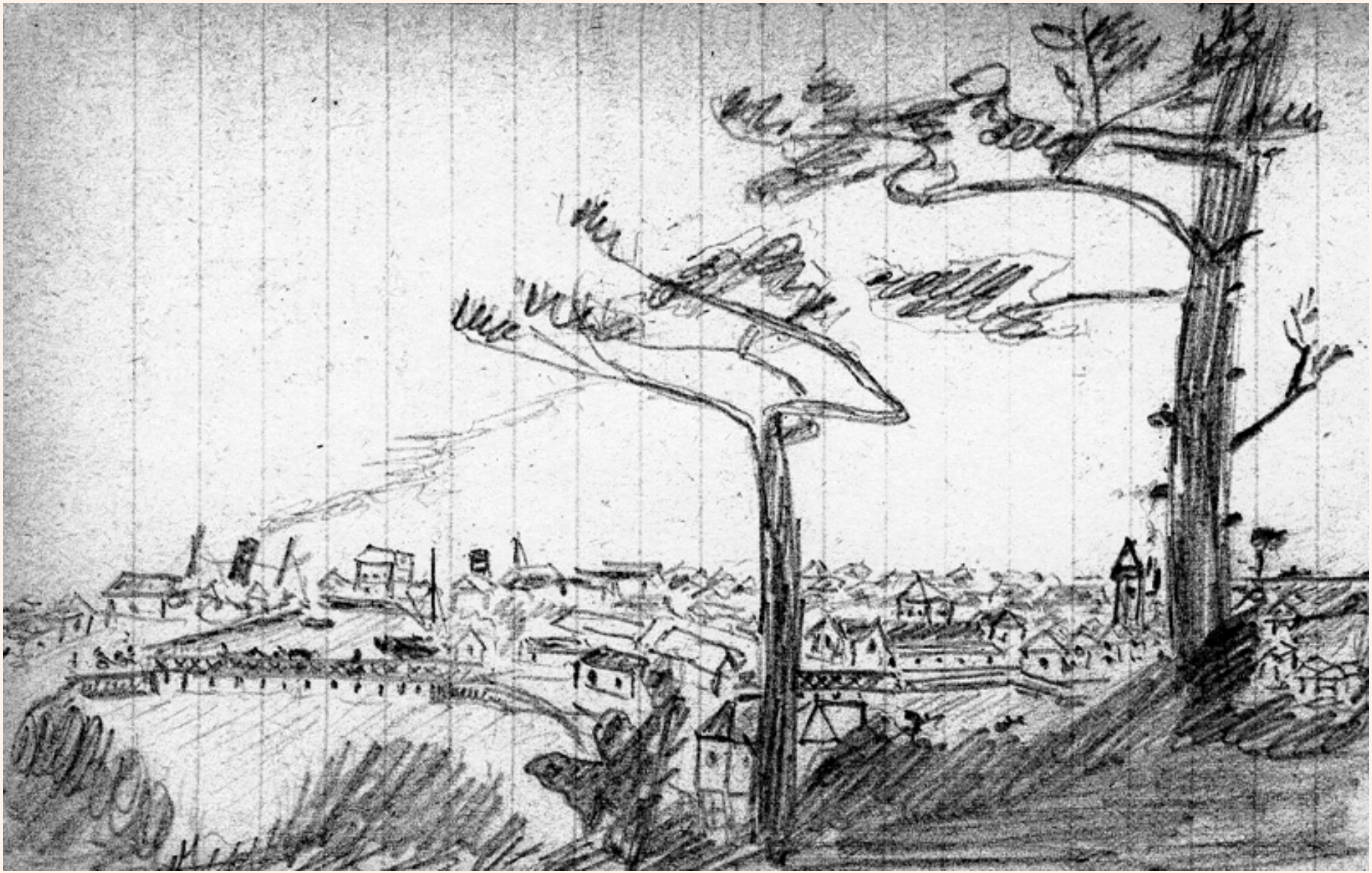
伊波普猷の『孤島苦の琉球史』の
中に挿入されたものと同じ写真
（上野帝国博物館から）





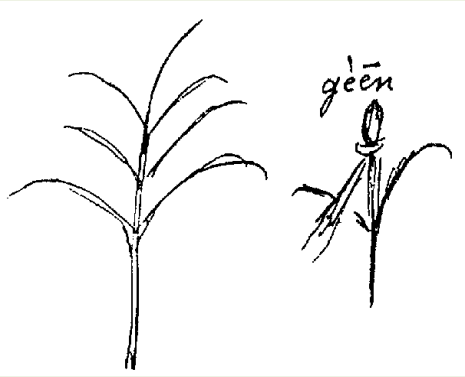
3月8日、辻の遊郭で一晩を過ごした





奥武山公園から眺めた那覇市

奥武山公園から眺めた那覇市



首里の年中行事、1頁

(la noro a fait (spécialement) (amagoi))

Tamagusuku

正月　pas de fête.

~~十日~~ 七日　wakamizu torre - ~~les enfants~~ la noro va puiser (prier) ~~puiser de l'eau~~ ~~la vendent de maison en maison.~~ de l'eau qu'elle offre à son dieu ~~[illegible]~~ femme. ~~[illegible]~~

三十日　les enfants du village vont puiser de l'eau à la rivière et la vendent ds. le village.
noro va au château

二月　十五日　offrande de riz.
Higan - on fabrique des mochi et offre aux morts.
[u-tomichi pr. le blé violet]

三月　三日　viande de cochon, daikon haché et des karaimes ; offert aux ancêtres,
on descend au rivage ~~et [illegible]~~ ; autrefois les serpents venimeux se transformaient en hommes.

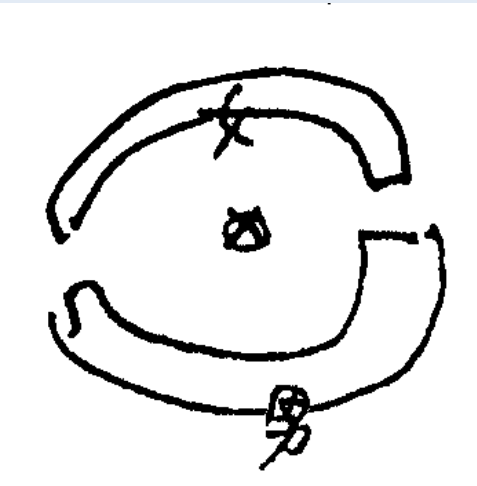
tous ces ~~[illegible]~~ ~~[illegible]~~ ceint de rouge ~~et les serpents~~ ~~akatama~~ ~~[illegible]~~

四月　shusibaré, on tue 1 cochon (~~[illegible]~~ 2 Kumi du village) pr. remercier les dieux lorsque visite Yamadome,

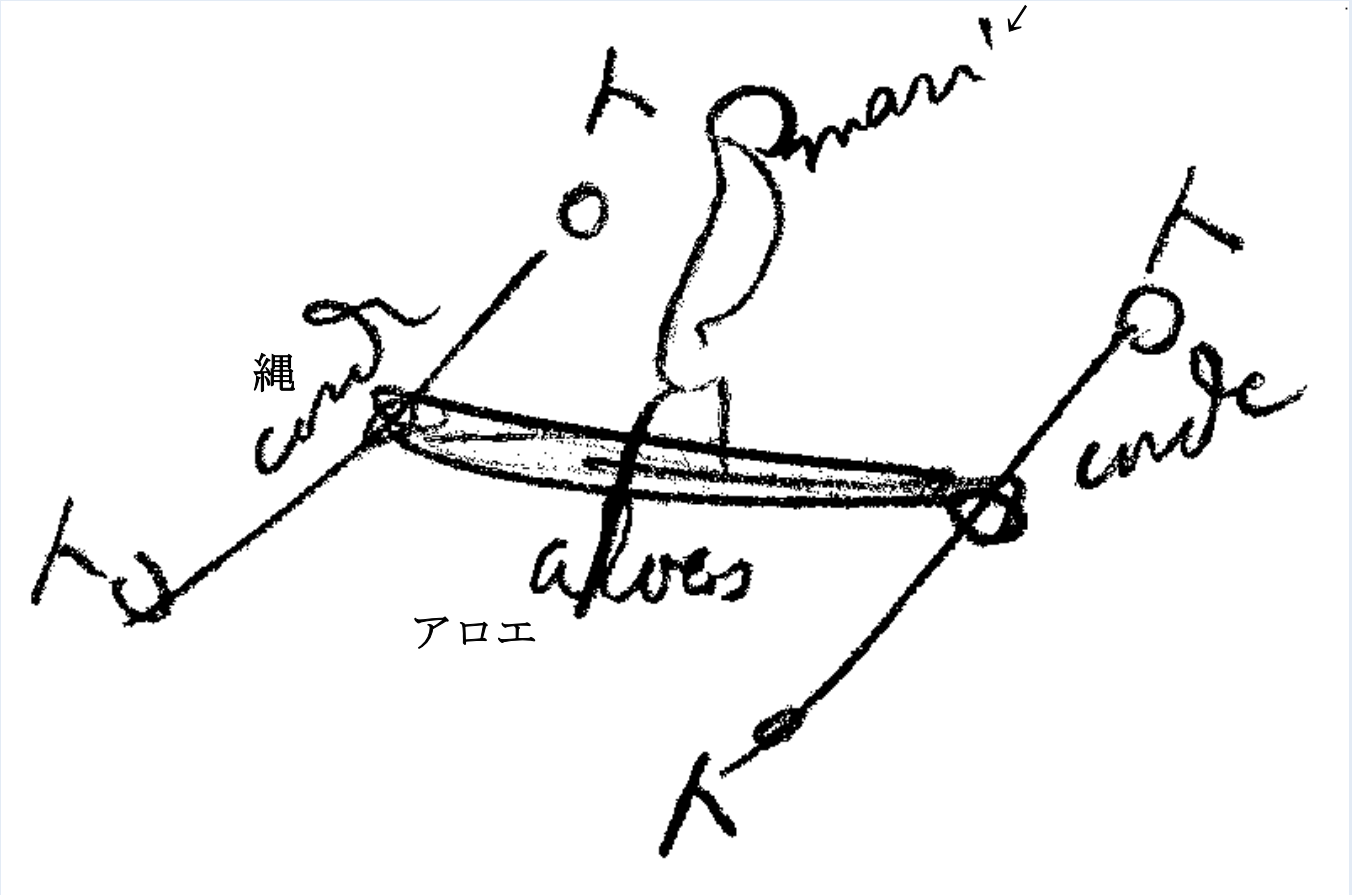
五月十五日　equinoxe (réduit du blé en farine. On cuit du riz. On mélange avec farine blé et on va porter au château là la noro la répartit entre les fidèles qui et. venus de ttes parts. yamaatte partiel. on dépose des kubu au château.

六月二十五日　yamaatte définitif (fin du tabou.)

Préliféte ~~de la~~ prier hônen, c'est la noro de ~~[illegible]~~ qui vient spécialement à Tamagusuku prier vers le 5e 月.



モーアシビ舞踊



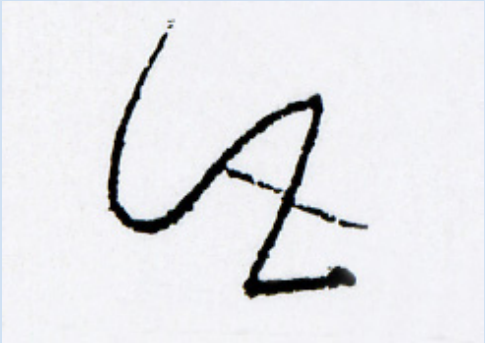
今帰仁・東村

ウマデマ（馬手間　ンマディマ）の試練

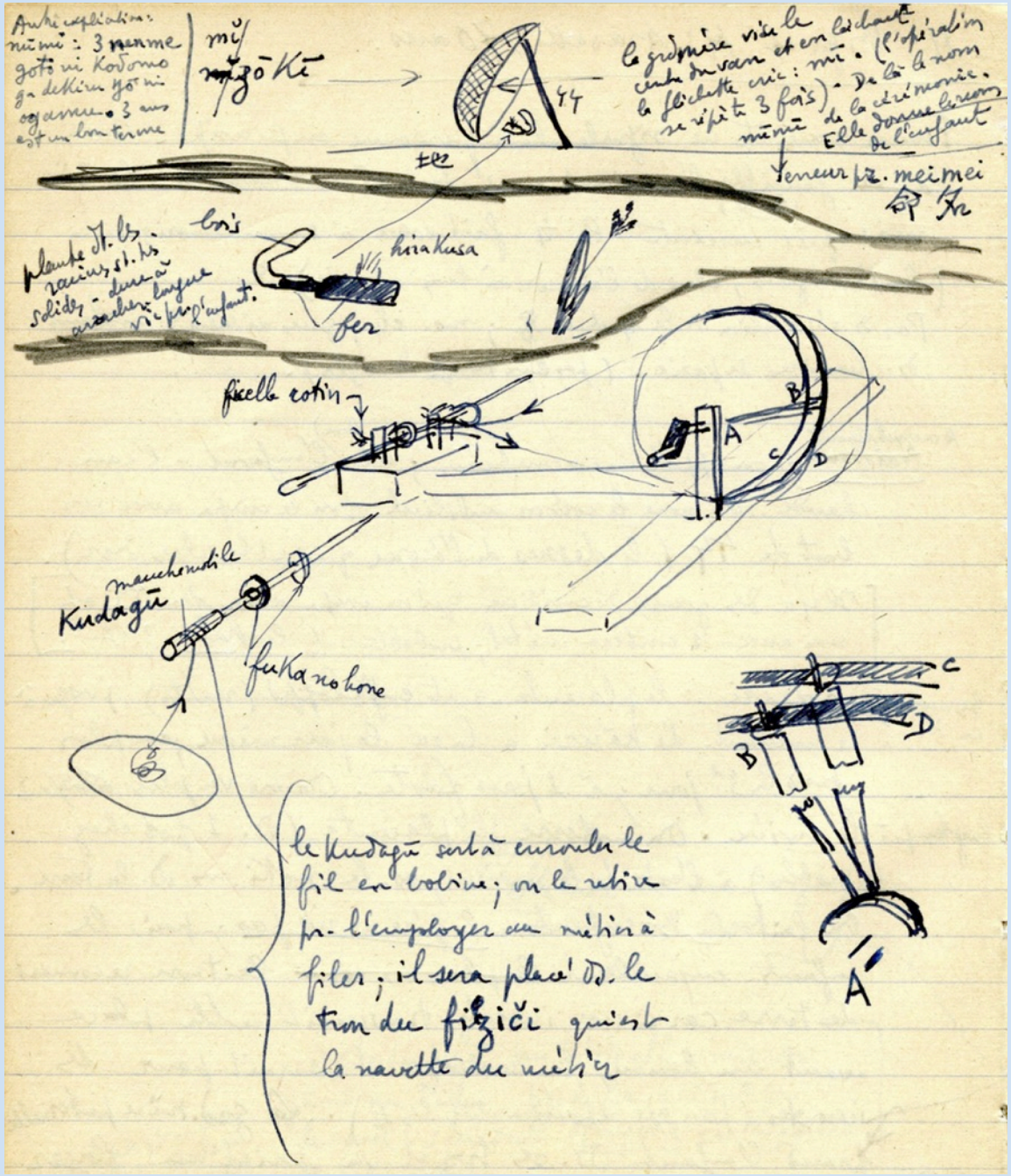
糸満

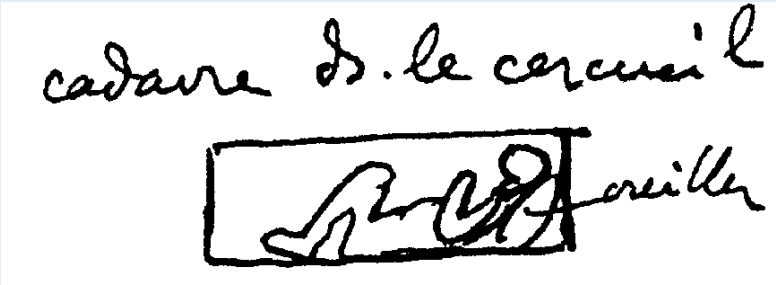
（上）命名儀礼

（下）命名儀礼に関する道具：
ミーズーキー（箕笊）、糸車、
クダグー、フィジチ（織機の杼）

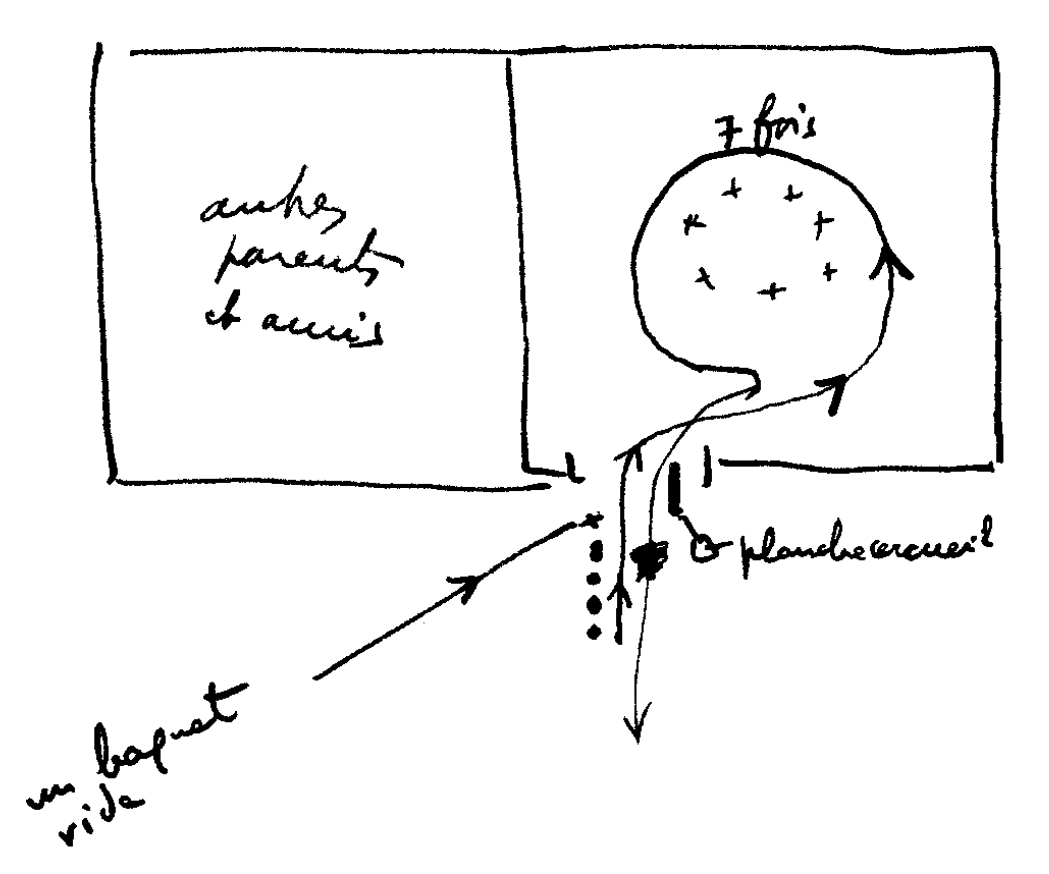


産婦の姿勢





糸満：棺に納められた故人の姿勢



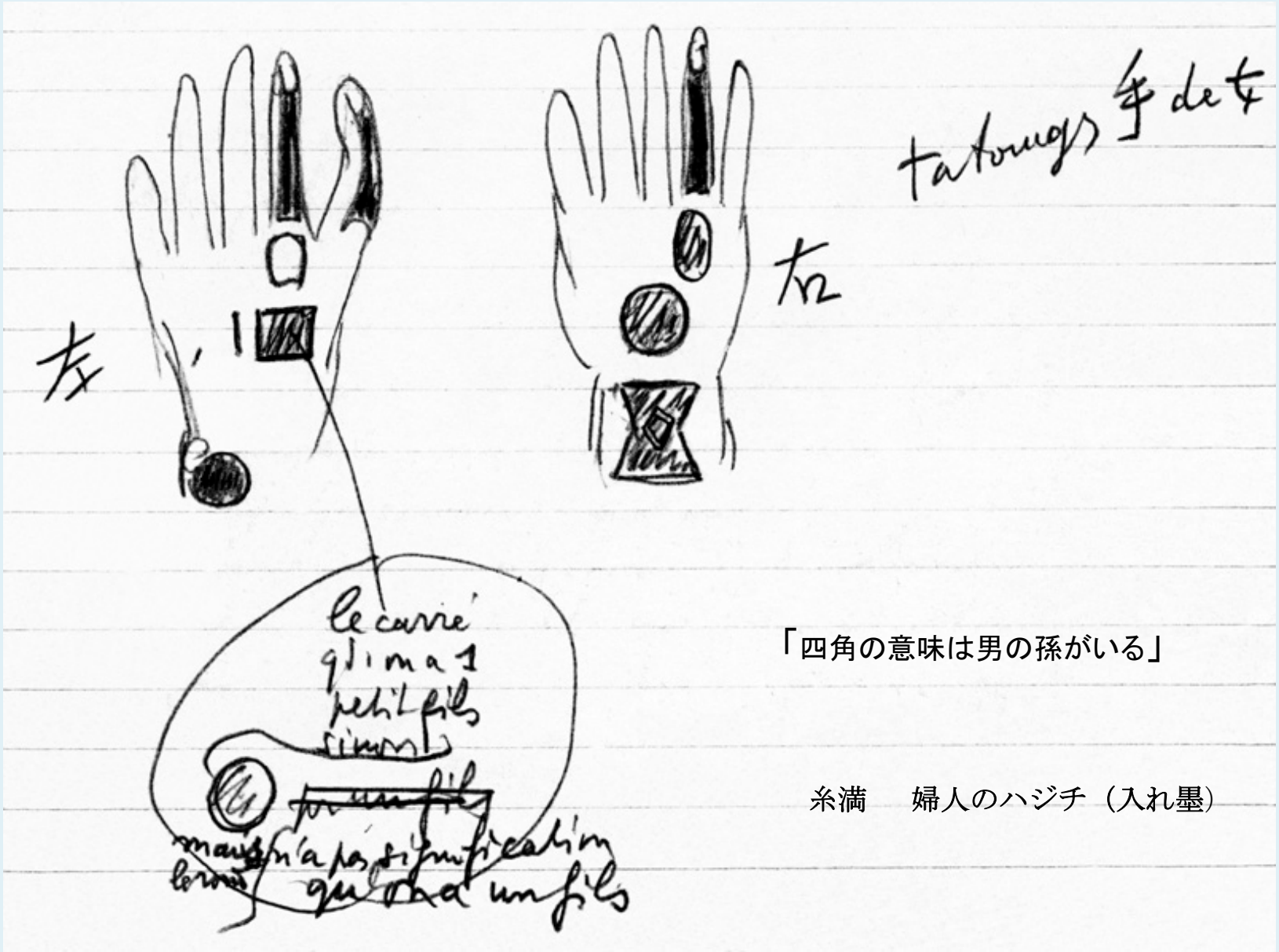
糸満：葬送儀礼、
家の中で七回の廻り

糸満

洗骨の儀式

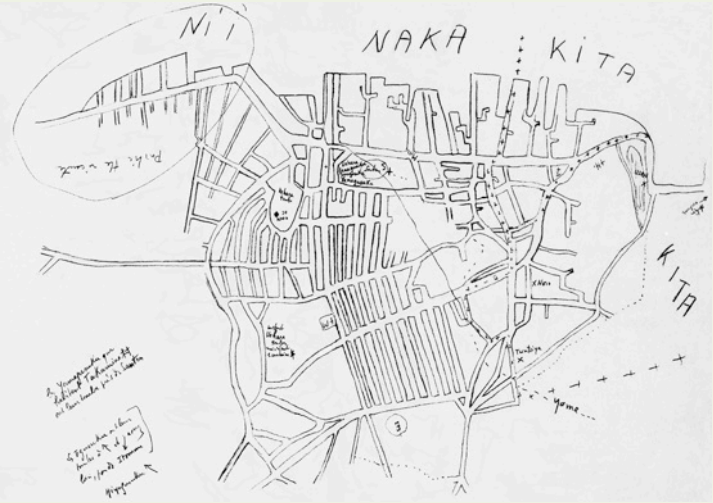
白い紙は「番の積り」と呼ばれる

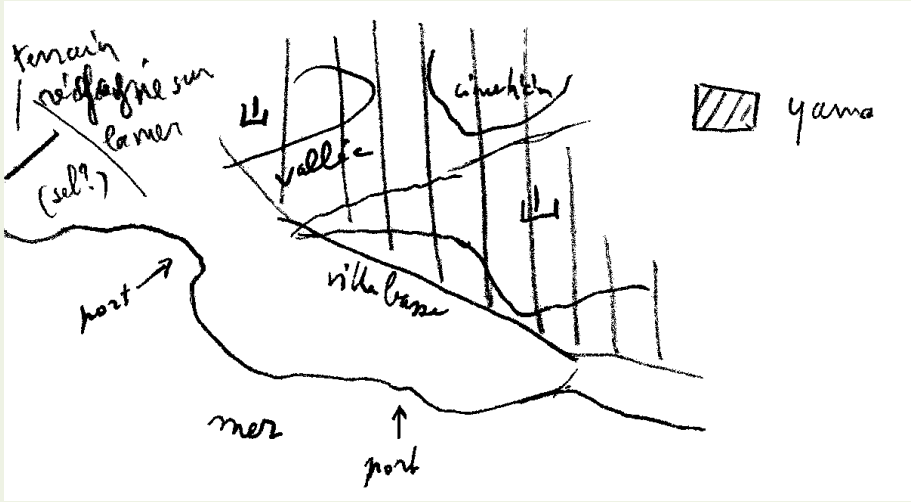
アジシー



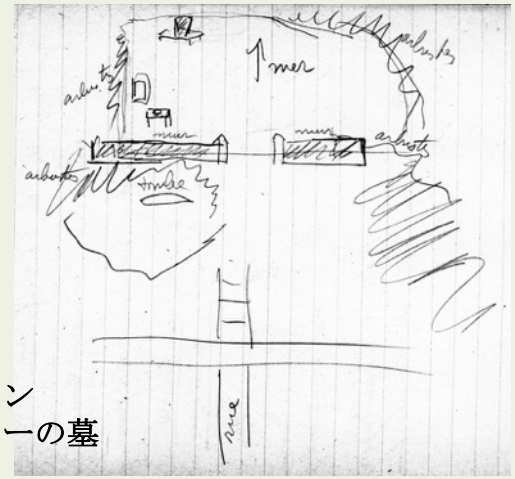
「四角の意味は男の孫がいる」

糸満　婦人のハジチ（入れ墨）

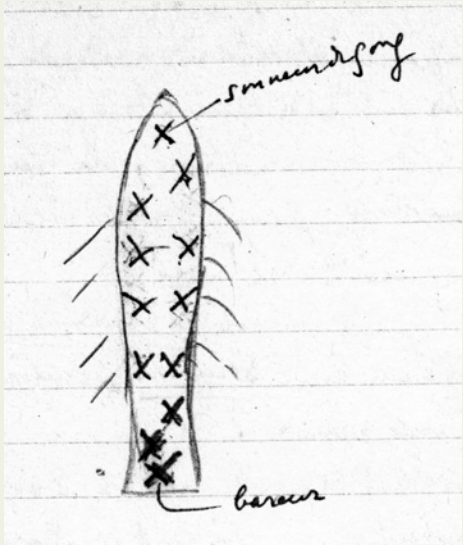


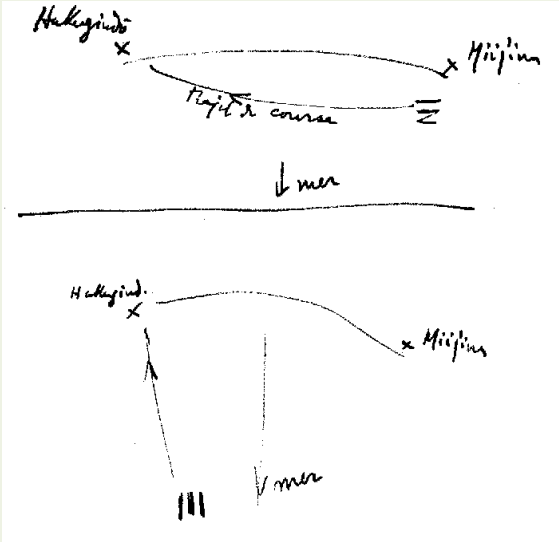


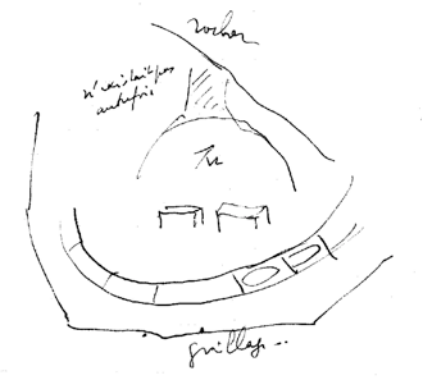
糸満

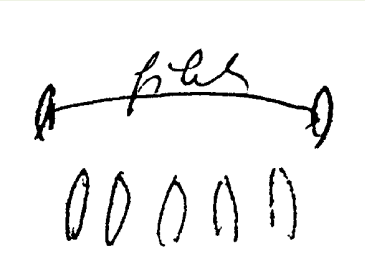


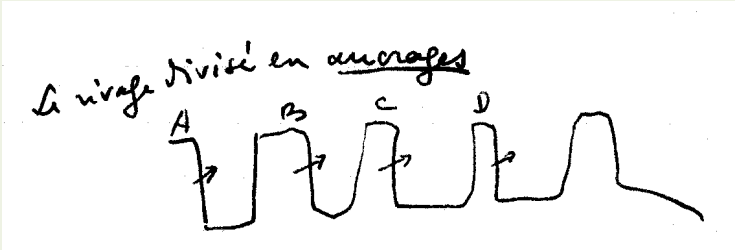
サンテン
タルミーの墓

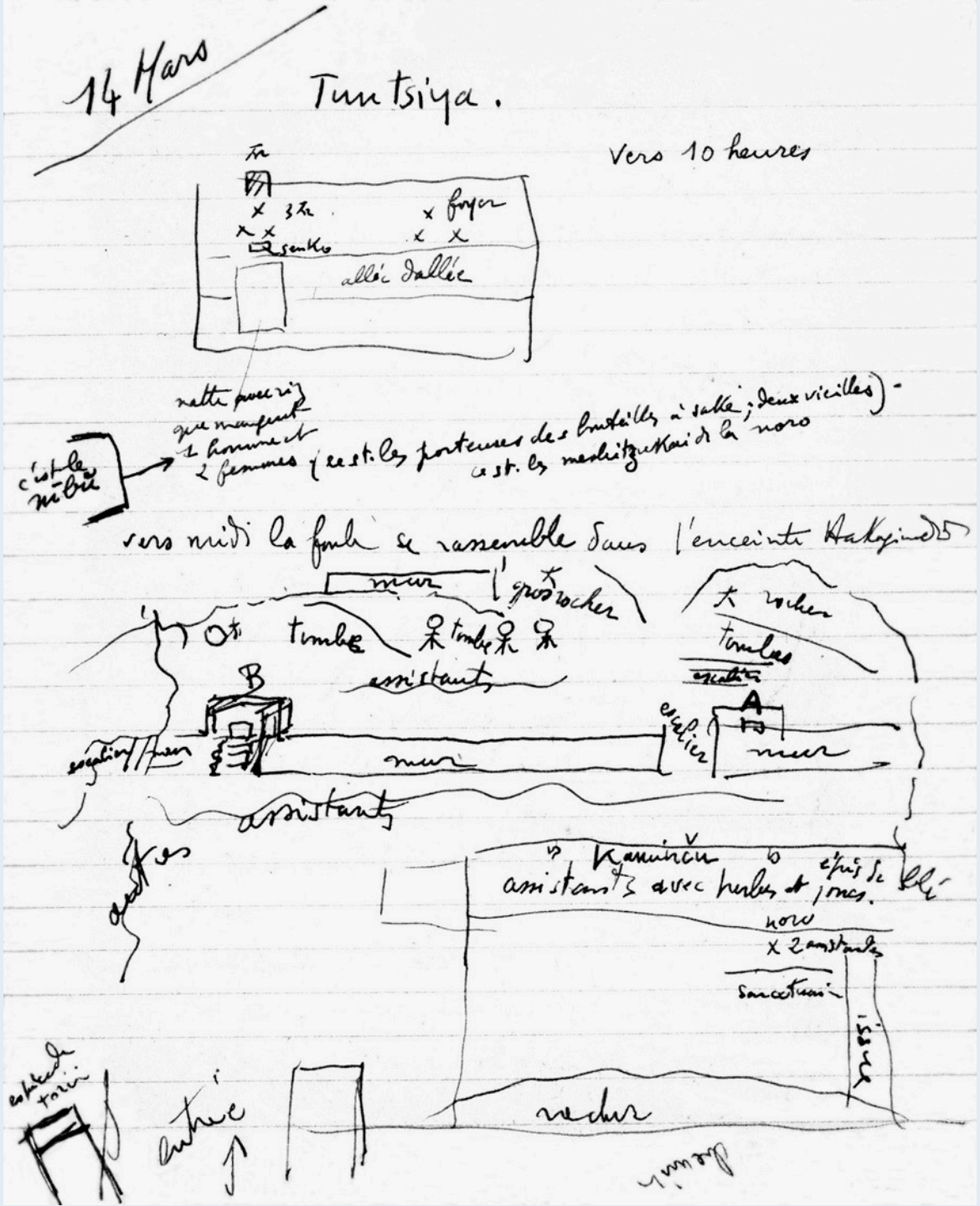




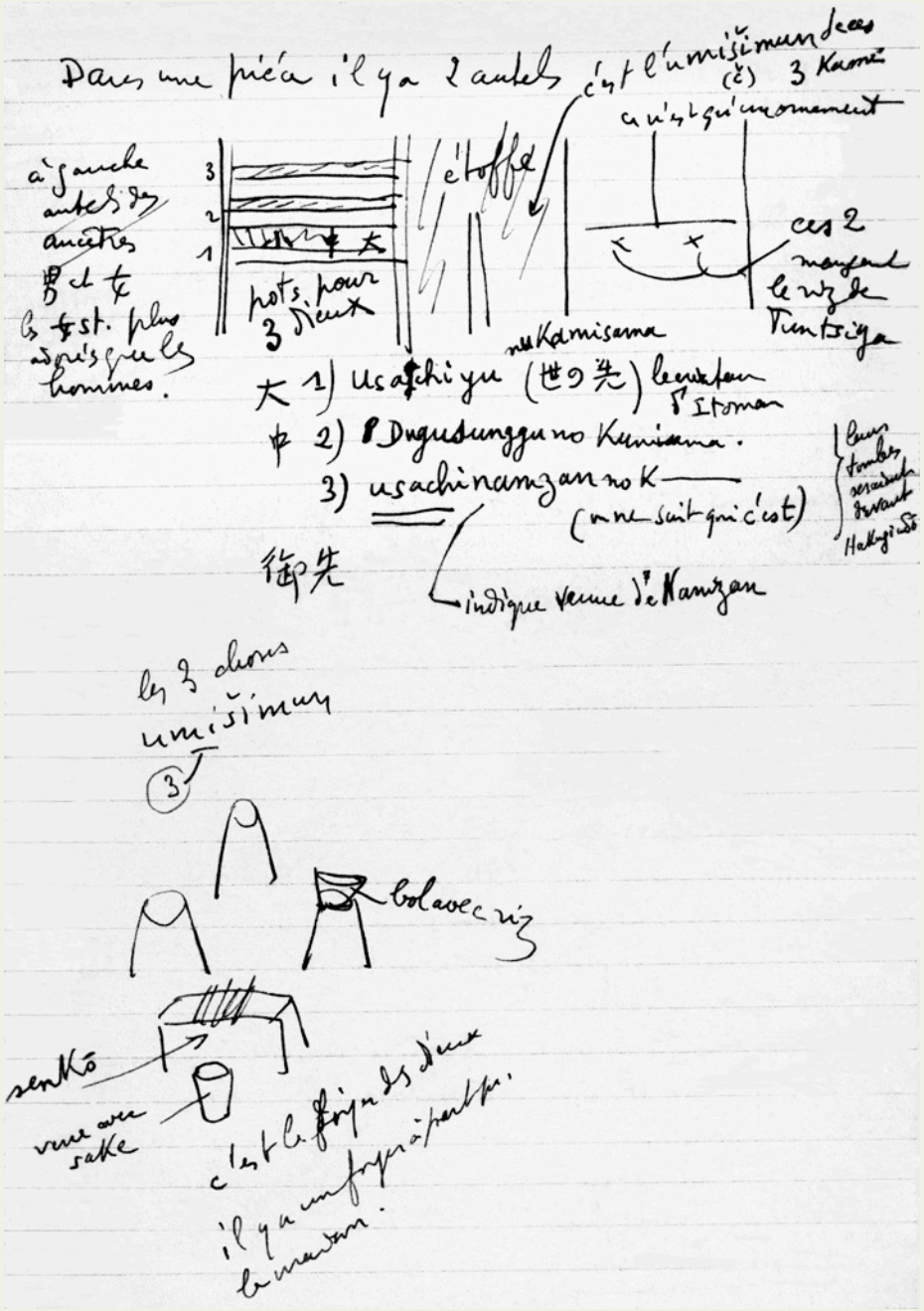


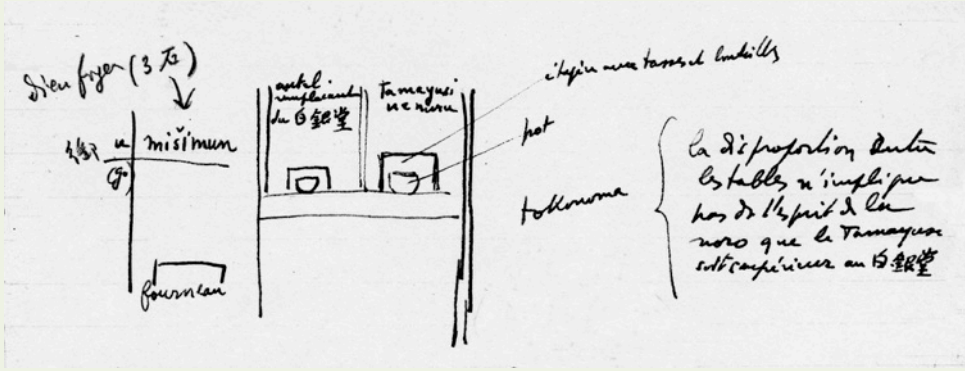




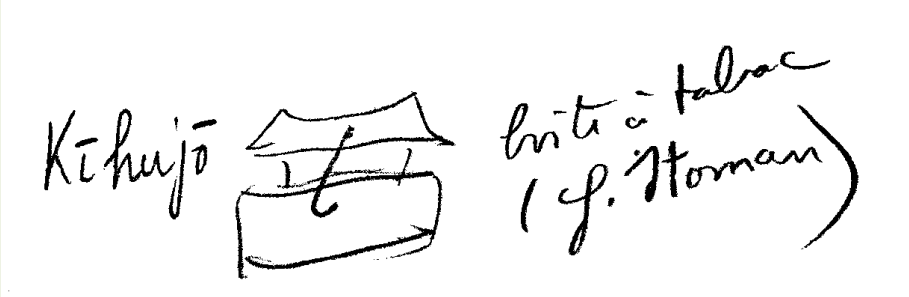


糸満村
1930年3月14日に行われた
トゥンチヤ祭


Dans une pièce il y a 2 autels
c'est l'umišimun de ces (ž) 3 Kami
a n'est qu'un ornement
étoffe
à gauche autels des ancêtres
pots pour 3 dieux
ces 2 mangent le riz de Tuntsiga
usachiyu (世の先) le ancêtre d'Itoman
Dugudungu no Kamisama.
usachinanzan no K—
(on ne sait qui c'est)
御先
indique venue de Nanzan
les 3 choses umišimun
3
bol avec riz
senkō
vase avec sake
c'est le foyer des dieux
il y a un foyer à part pour le nanzan.


Dieu foyer (3 ⅓)
misimun
fourneau
autel simplement du 白銀堂
Tamayuri ne nuru
chaque vase tasses et bouteilles
pot
tokkoroma
la disproportion entre les tables n'implique pas de l'esprit de la noro que le Tamayuri est supérieure au 白銀堂

糸満
ノロの神棚


Kihujō
boîte à tabac
(cf. Itoman)

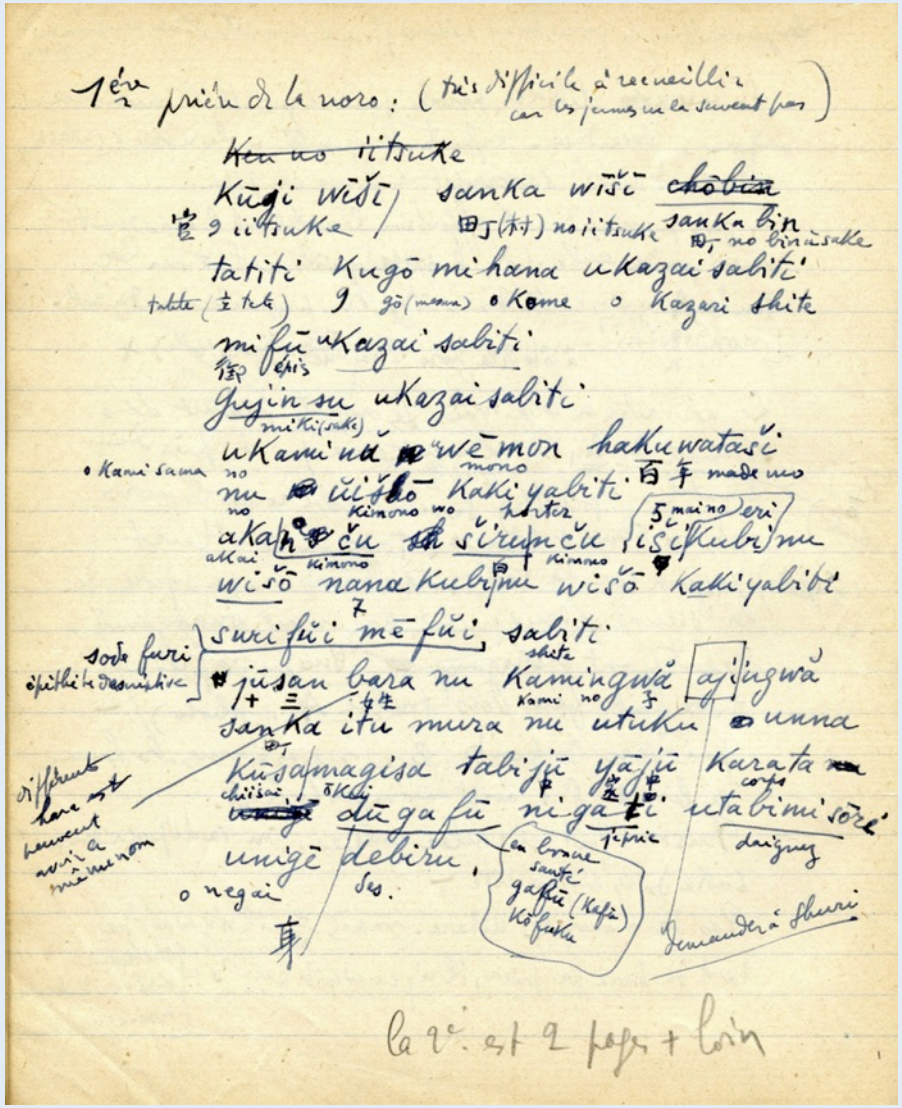
１８５５年に生まれた７６歳の糸満ノロクモイの国吉ウシさんと、１２歳になる糸満根神の金城トシさん

（糸満市監査委員事務局長　金城善さんからの情報）

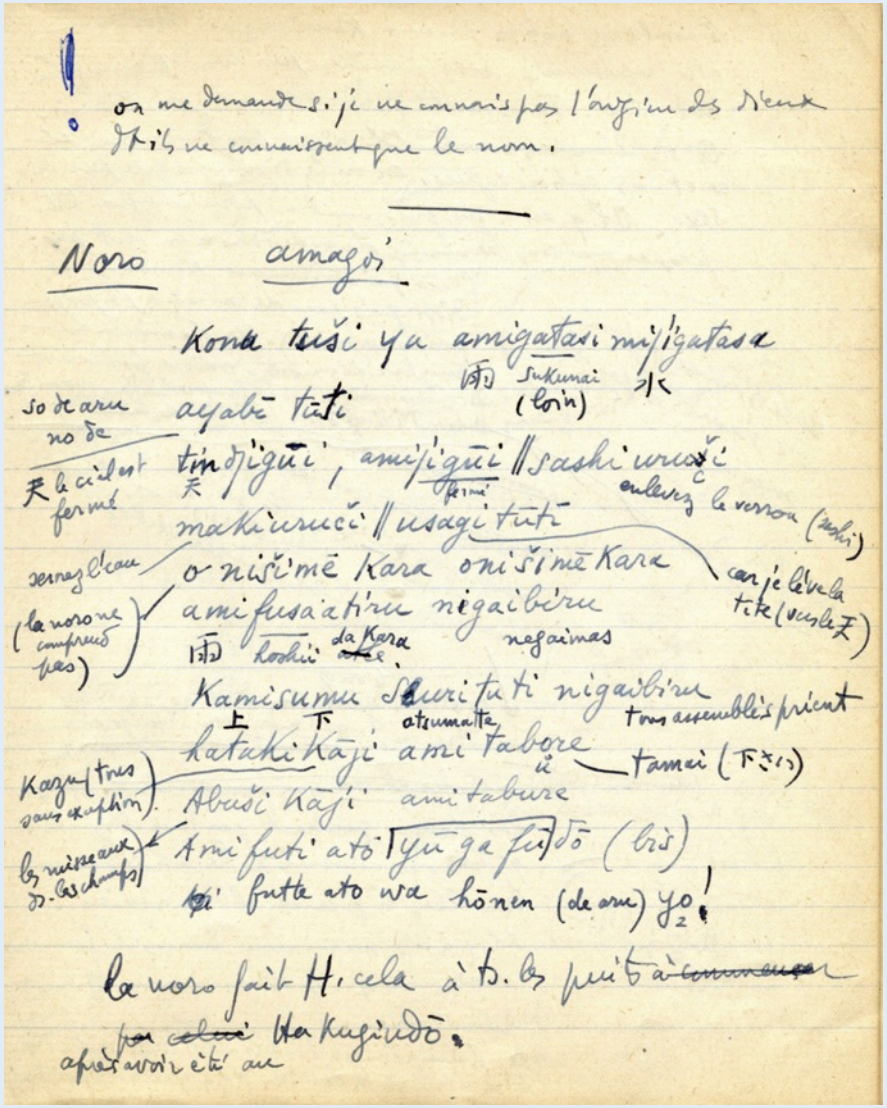
糸満の人々？

糸満のノロが唱えた祈願の第一節目

「非常に書き留めが難しい、若い者が祈願を解らないので」



糸満のノロが唱えた雨乞い



Chants p. la maison : (par un femme qui en fait le métier)

(I) Pr. les colonnes avant que le trit ne soit posé :

Tabing King yusiti

旅 no Kimo yosete

hašira ni agiti

hashira (ni) mune (mo) agete

nakamuwe Kugani

(naka bāya) naka no heshira Kogane (or)

Tukubusiya nanja. (?)

toko wa gin (argent)

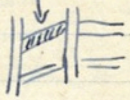
nukiya Kurokani

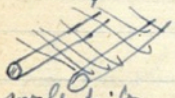
— wa Kuroi Kane (fer)

Kisiya Kizaku

Kane.

nuki : les traverses de coté





sous les tuiles et le chaume du toit

(II) iwai no uta q.d. la maison est finie.

Kuni yašiki. yašiki

Kmo yashiki

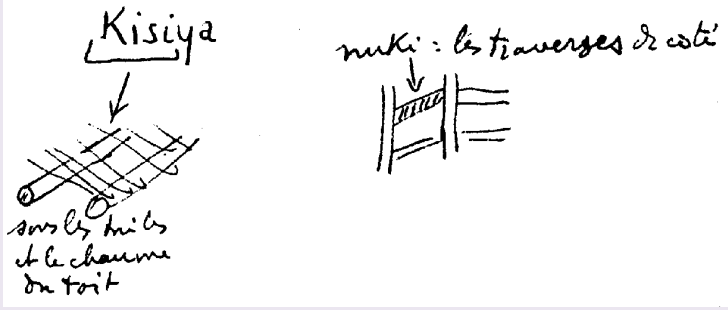
Kinaiong iriyaliti

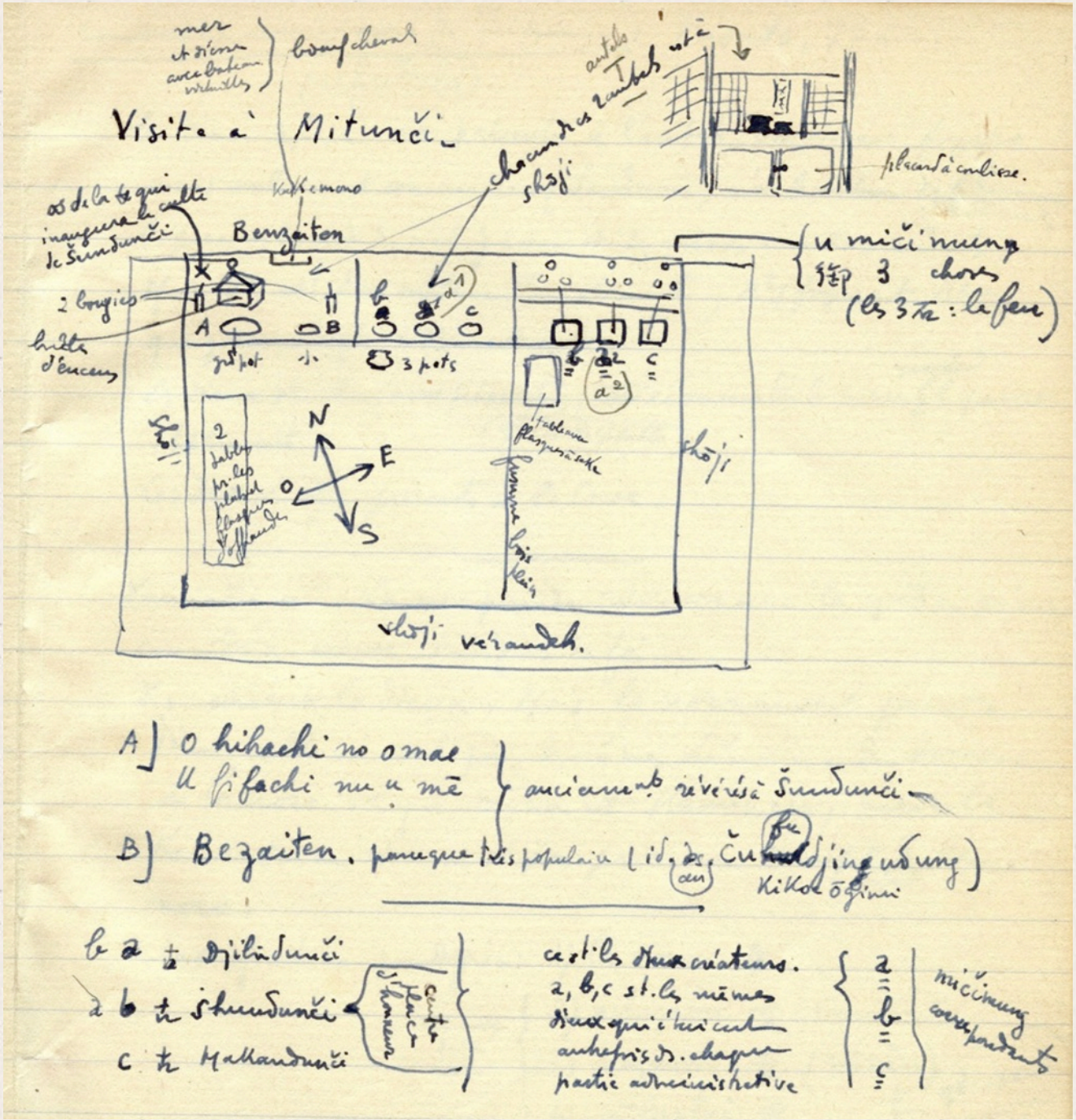
Okinawa no jeune fille à arpenter

ireru (hakaru - calculer)

糸満

柱立て祝いの歌





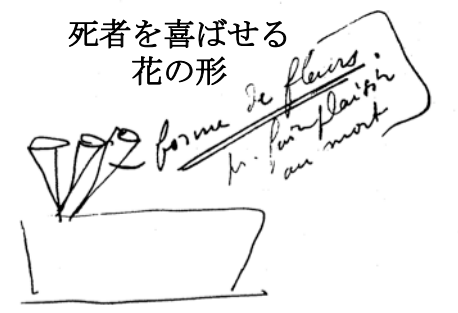
首里

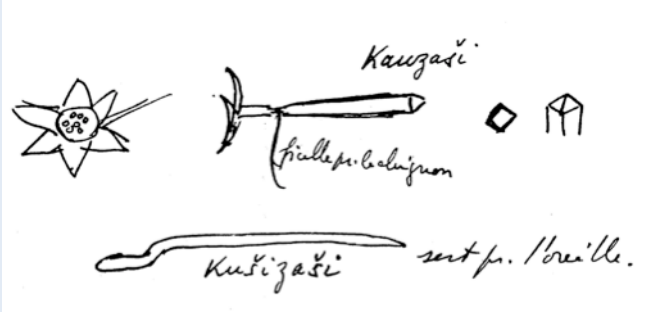
首里の三殿内
Mitunči

首里

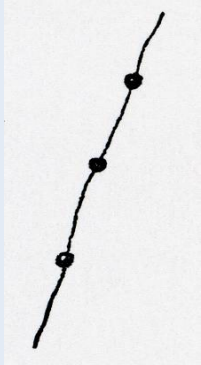
三殿内ウフシュビ（大主部）
の77歳富里ママツと誰？

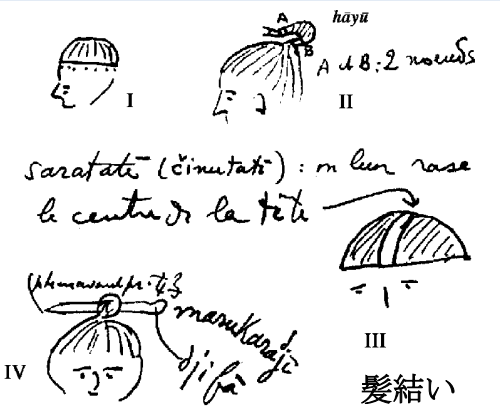
死者を喜ばせる
花の形



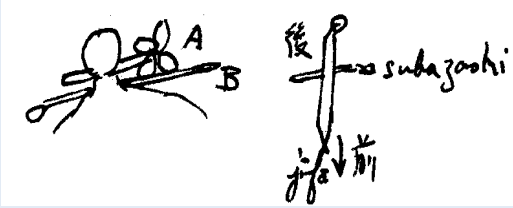


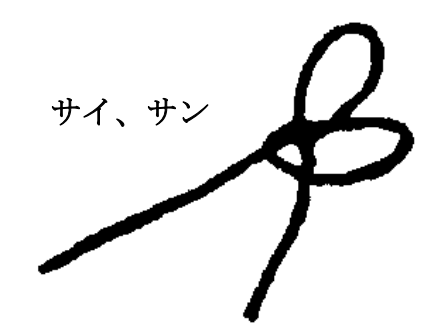
ユタの服

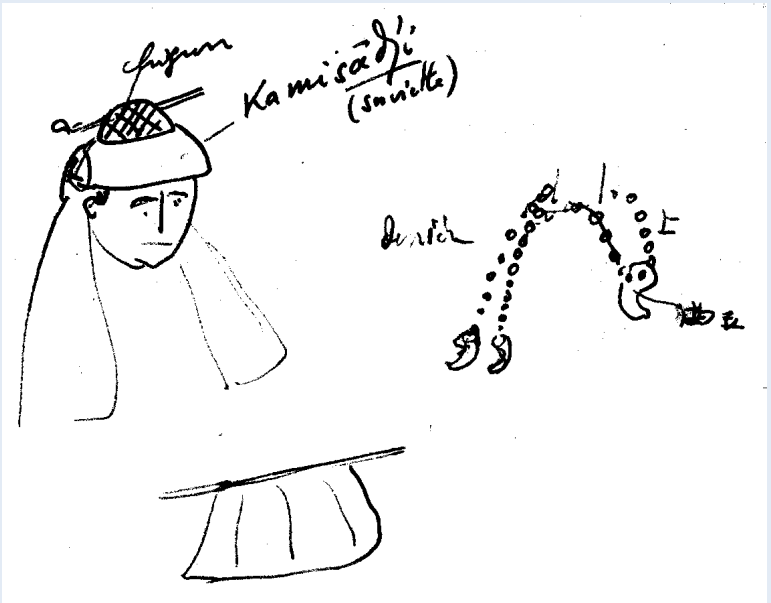


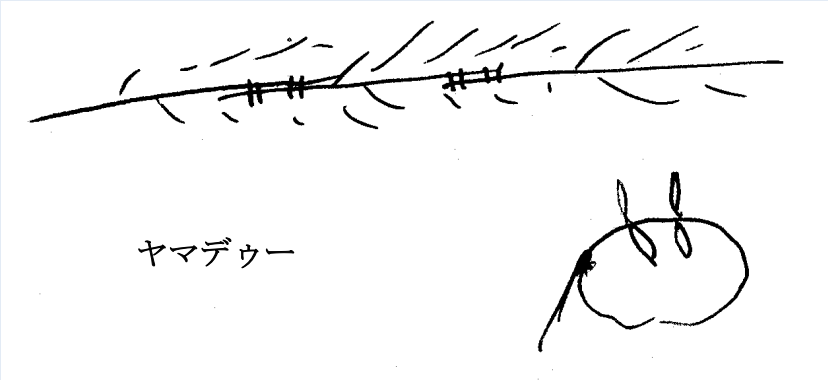


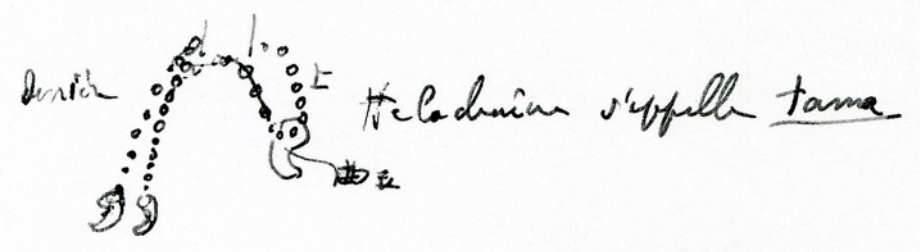
髪結い



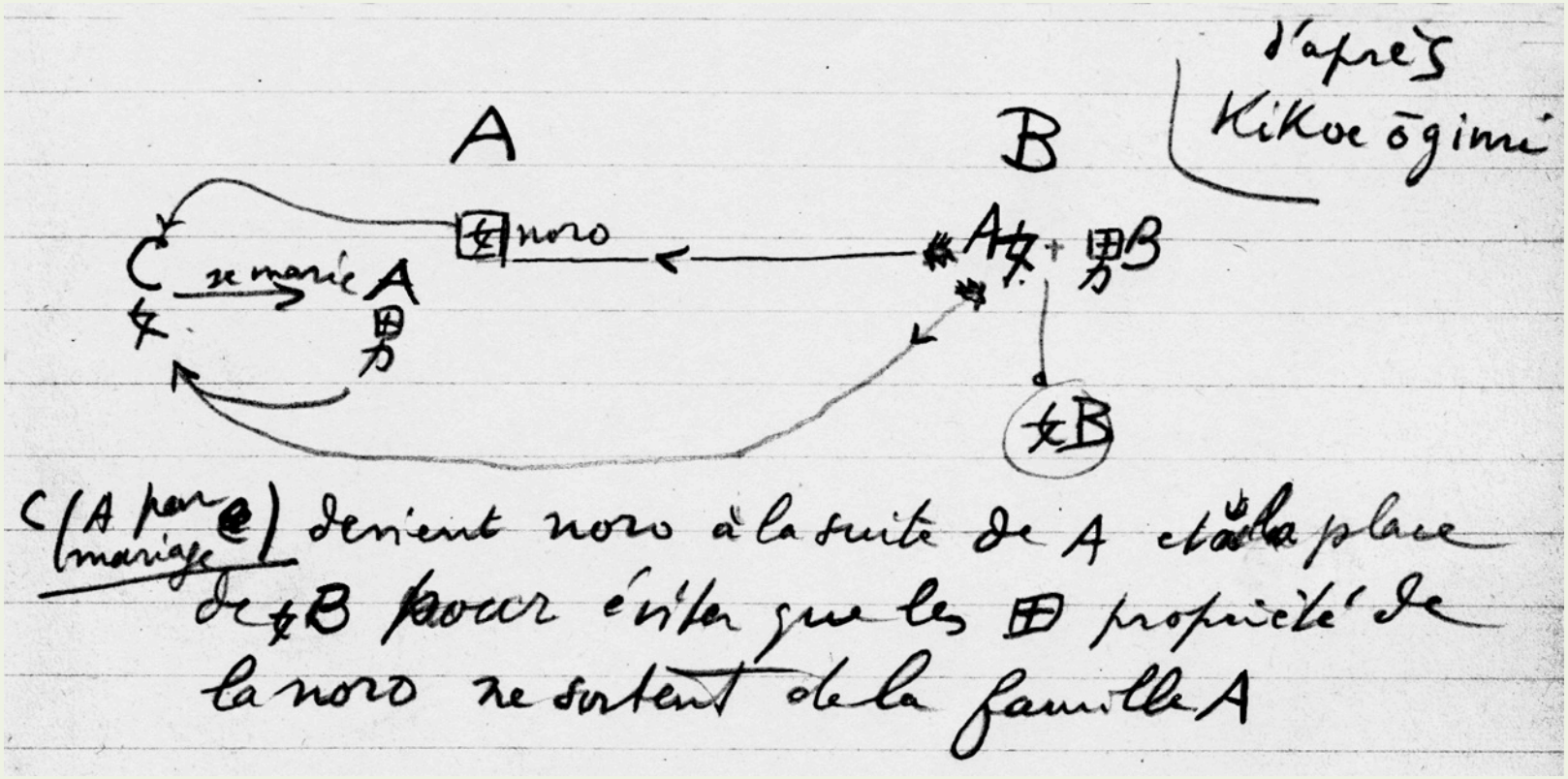






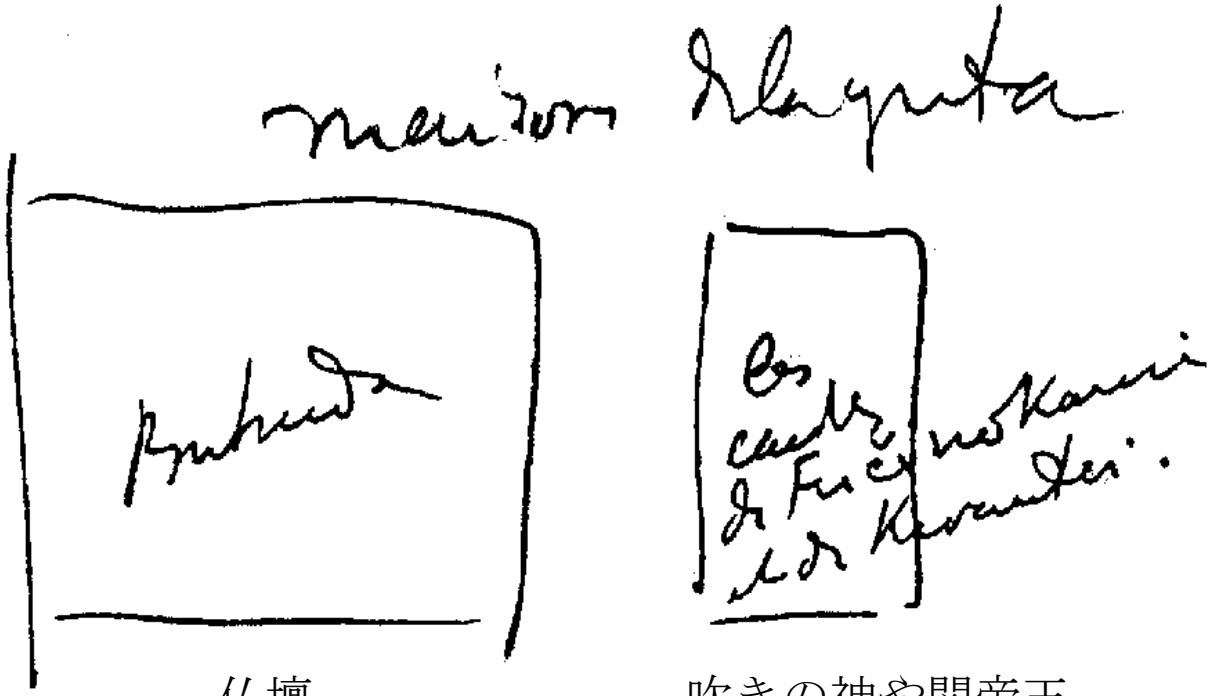


「聞得大君の言うによれば首里のノロ職の継承方式」

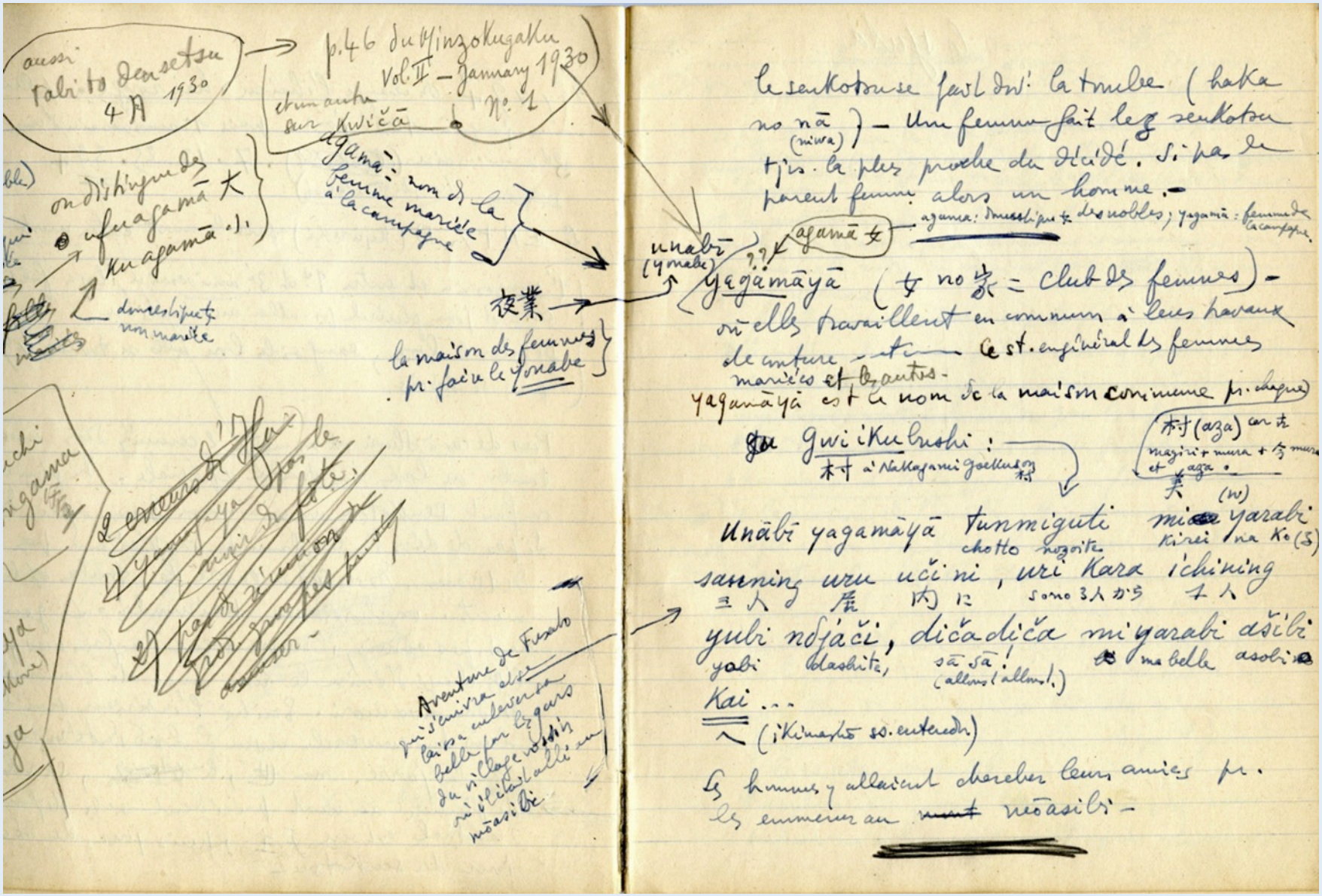


「A女は A家が田の所有権を失わないために、結婚によってB女の代わりにノロになった」（原文のまま）

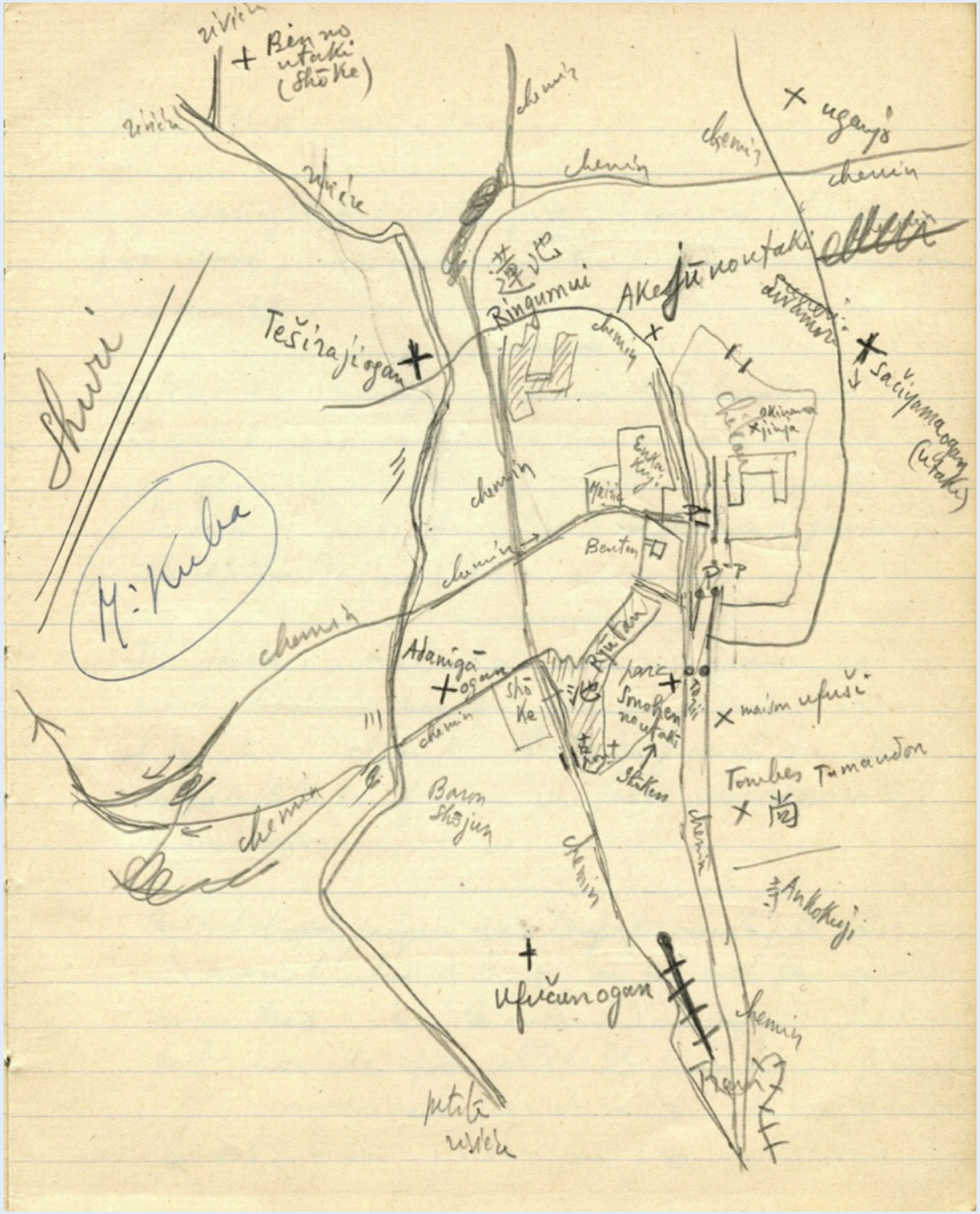
首里の鳥小堀地区
54歳のユタ　玉城ウター



仏壇　　吹きの神や関帝王

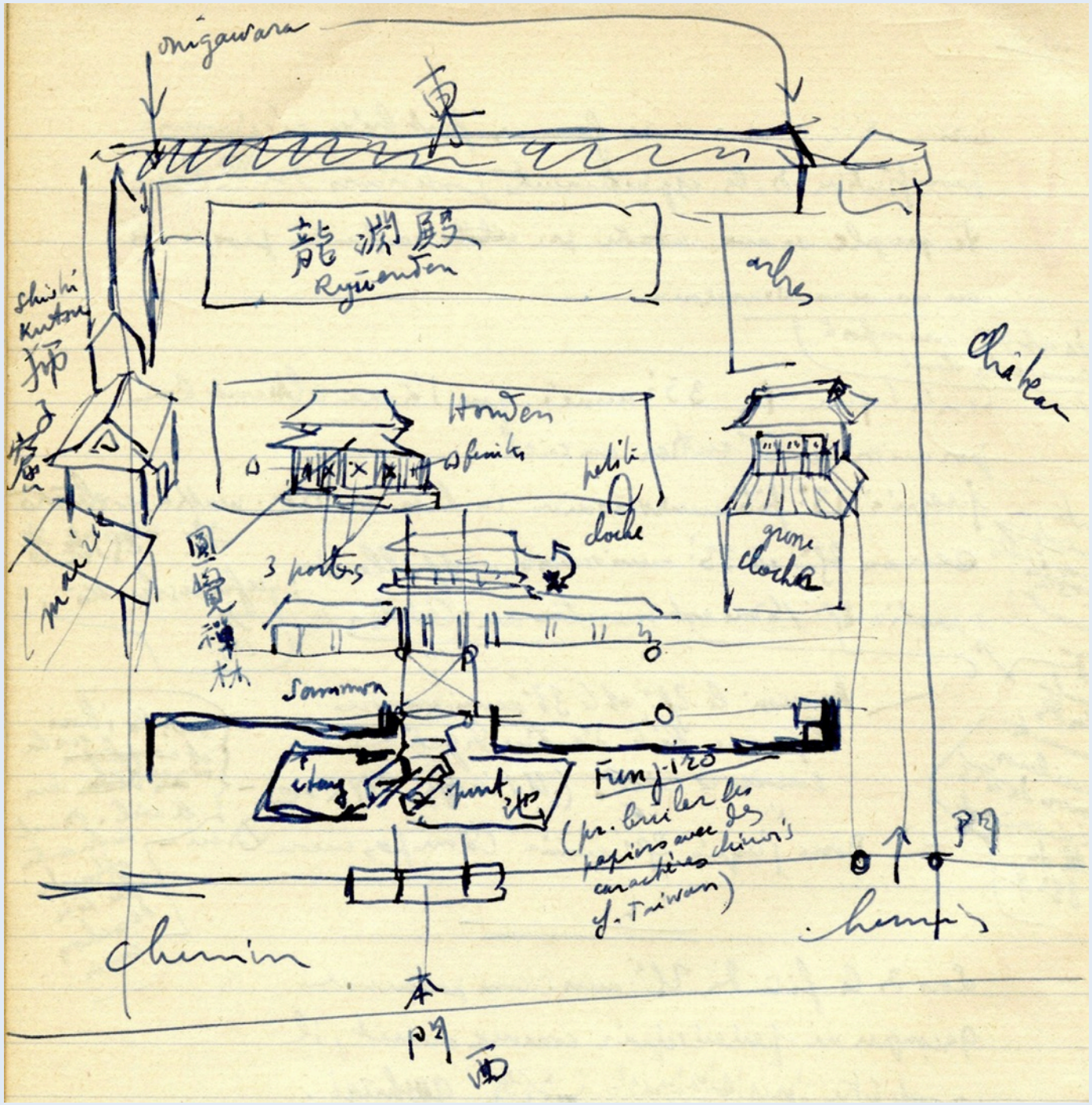


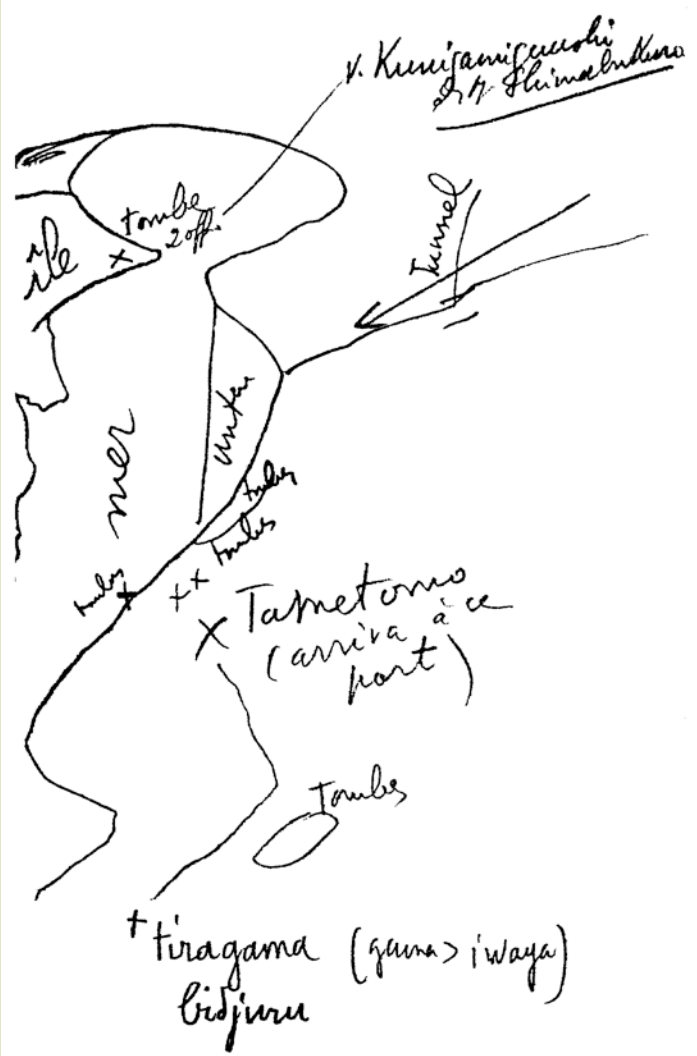
『首里』ノートブックの中
洗骨、ヤガマヤー、「越来節」


chemin
Ringumui
Akegu no utaki
Teširaji ogan
Sacijamaogan (utaki)
Adaniga ogan
Smoken no utaki
maison ufuši
Tombes Tamaudon
Ufučunogan
chemin

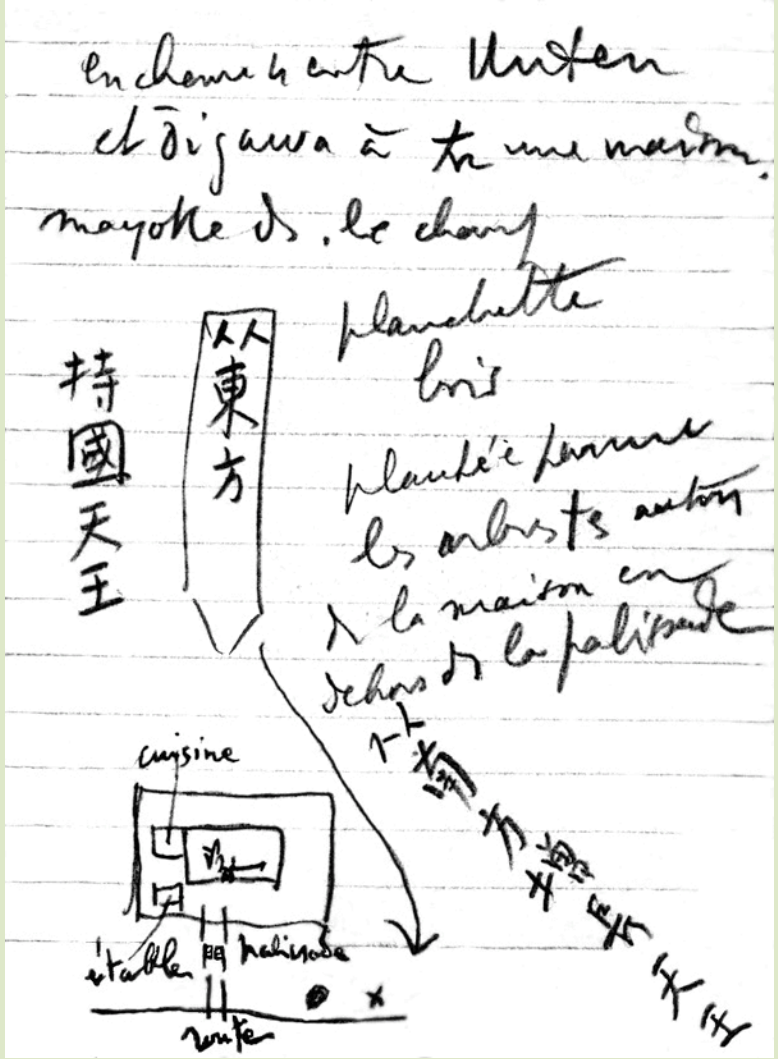
首里の地図

円覚寺

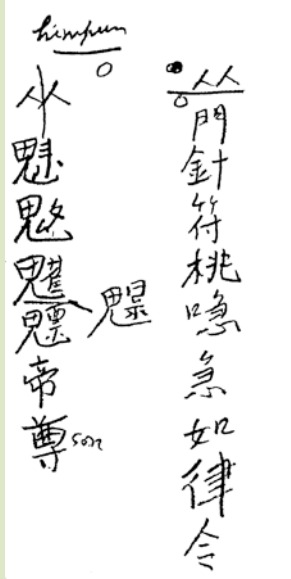

Origawara
東
龍淵殿
Ryuenden
arbres
Chiken
Shishi Kutsu
Hondon
shrine
petite cloche
grande cloche
3 portes
Sommon
étang
pont
Fun-j-ro
(pr. brûler les papiers avec des caractères chinois
cf. Taiwan)
chemin
chemin
門
本門
西



運天湾・屋我地島
ティラガマ（岩屋）、ビジュル、のオランダ墓（仏人の墓）、源為朝入港

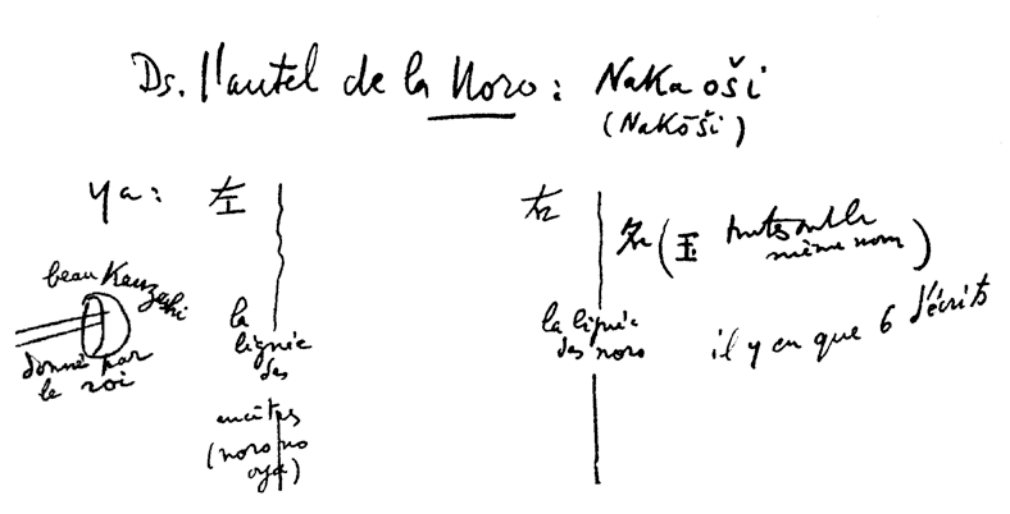


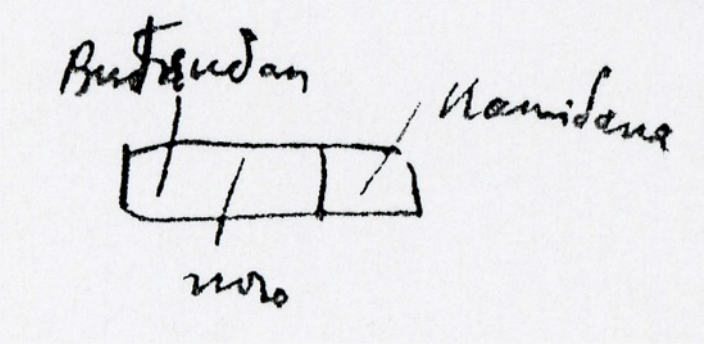
運天と大井川の間に位置する家
魔除け（小さな板）

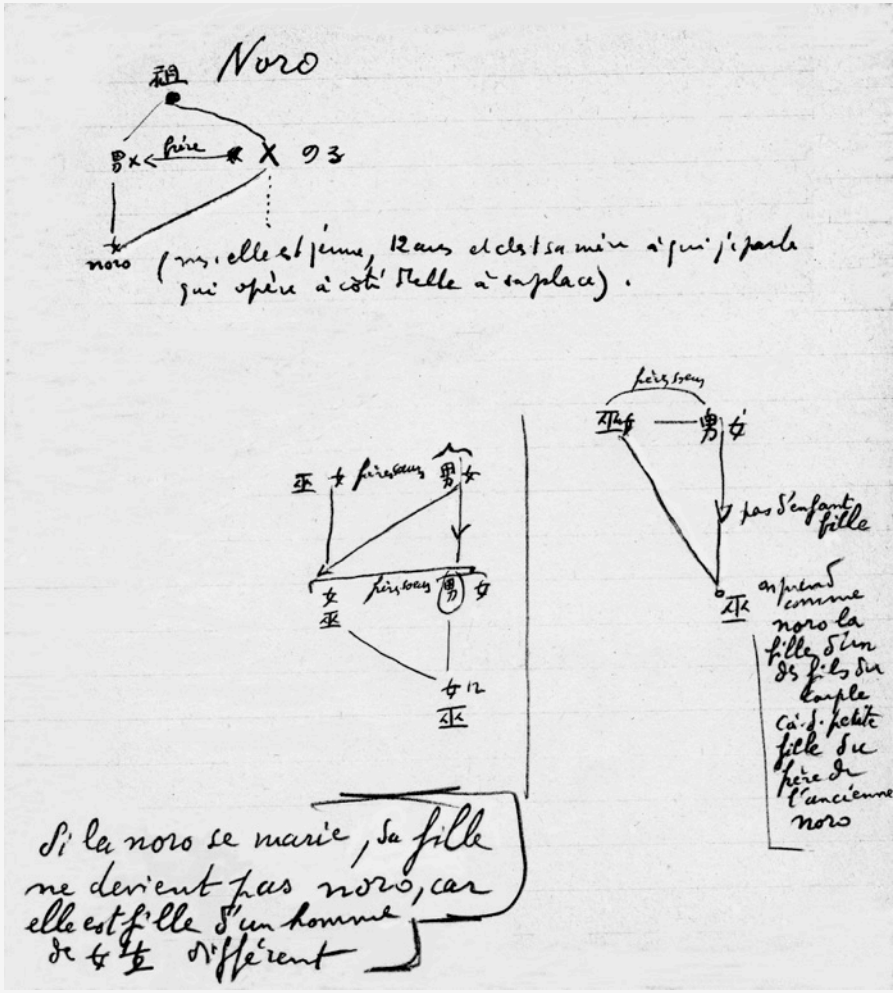


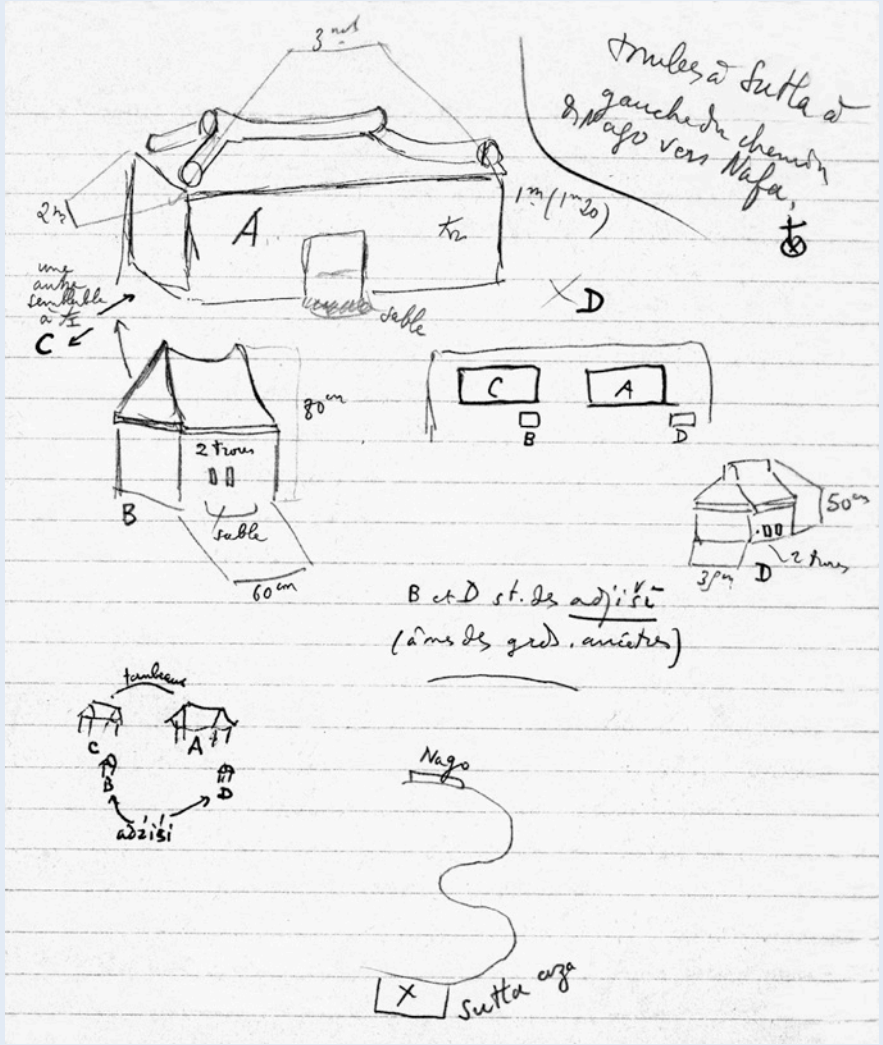
今泊字
仲尾次ノロの家の
仏壇と神棚

ノロ職継承系図

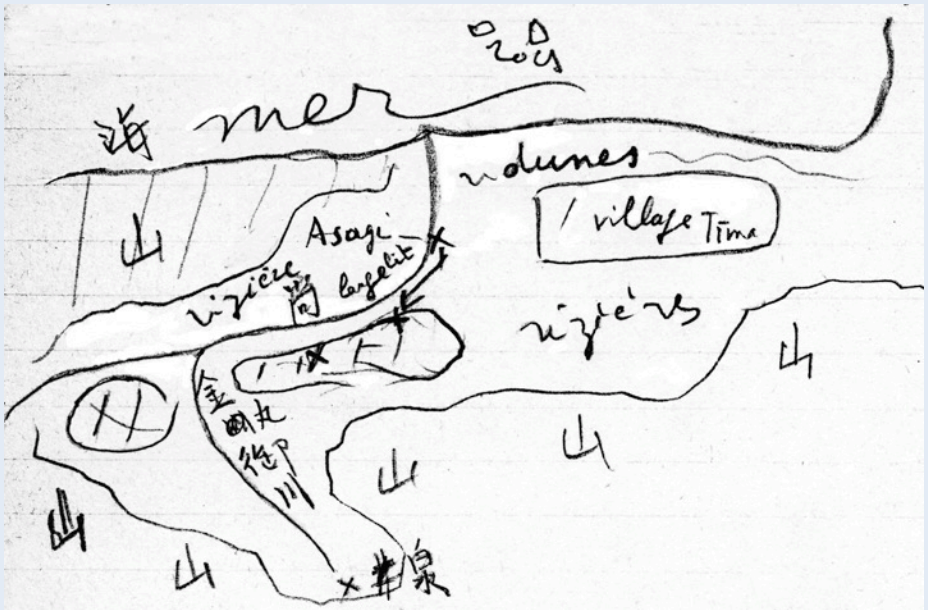




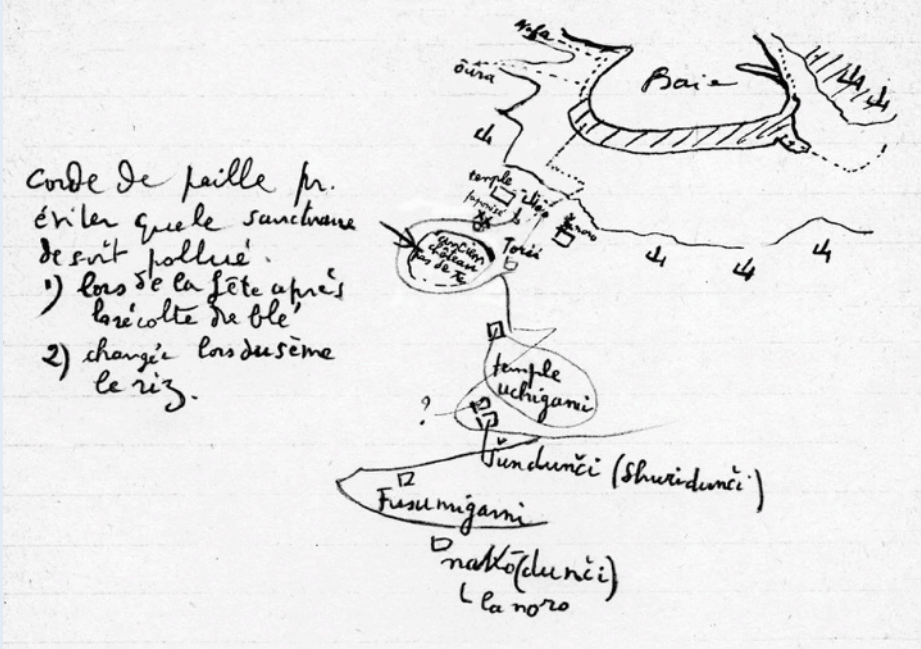




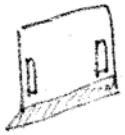
数久田（スッタ）字の墓とアジシ



汀間字



名護湾：シュン（首里）殿内、ナコウ殿内、ノロの住宅

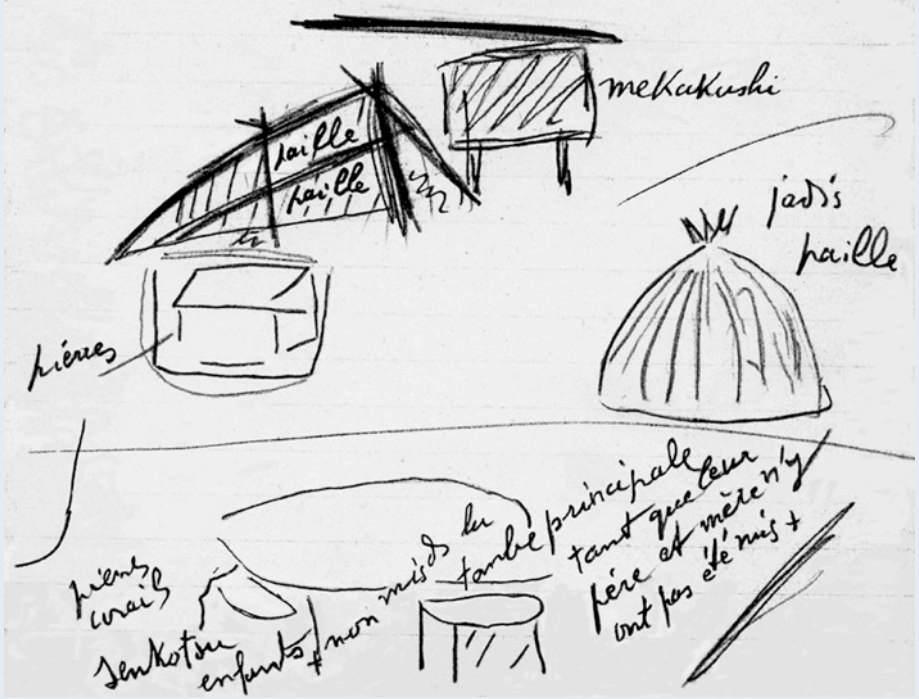


les 2 trois sont pour que l'âme puisse aller et venir

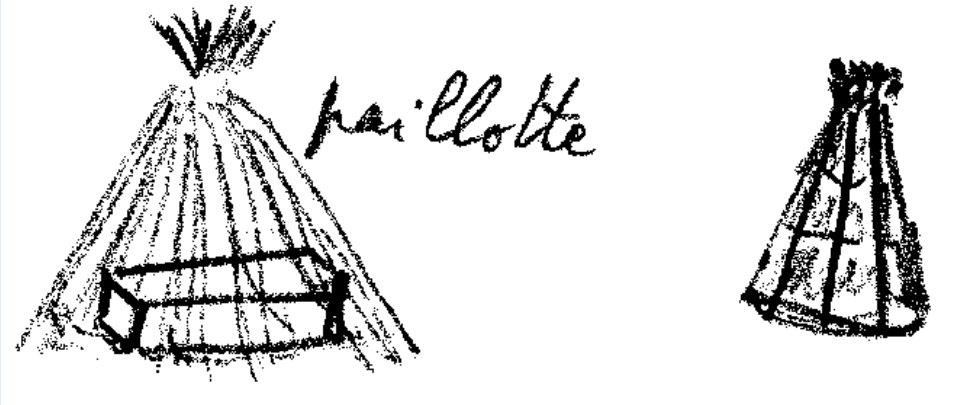
東村

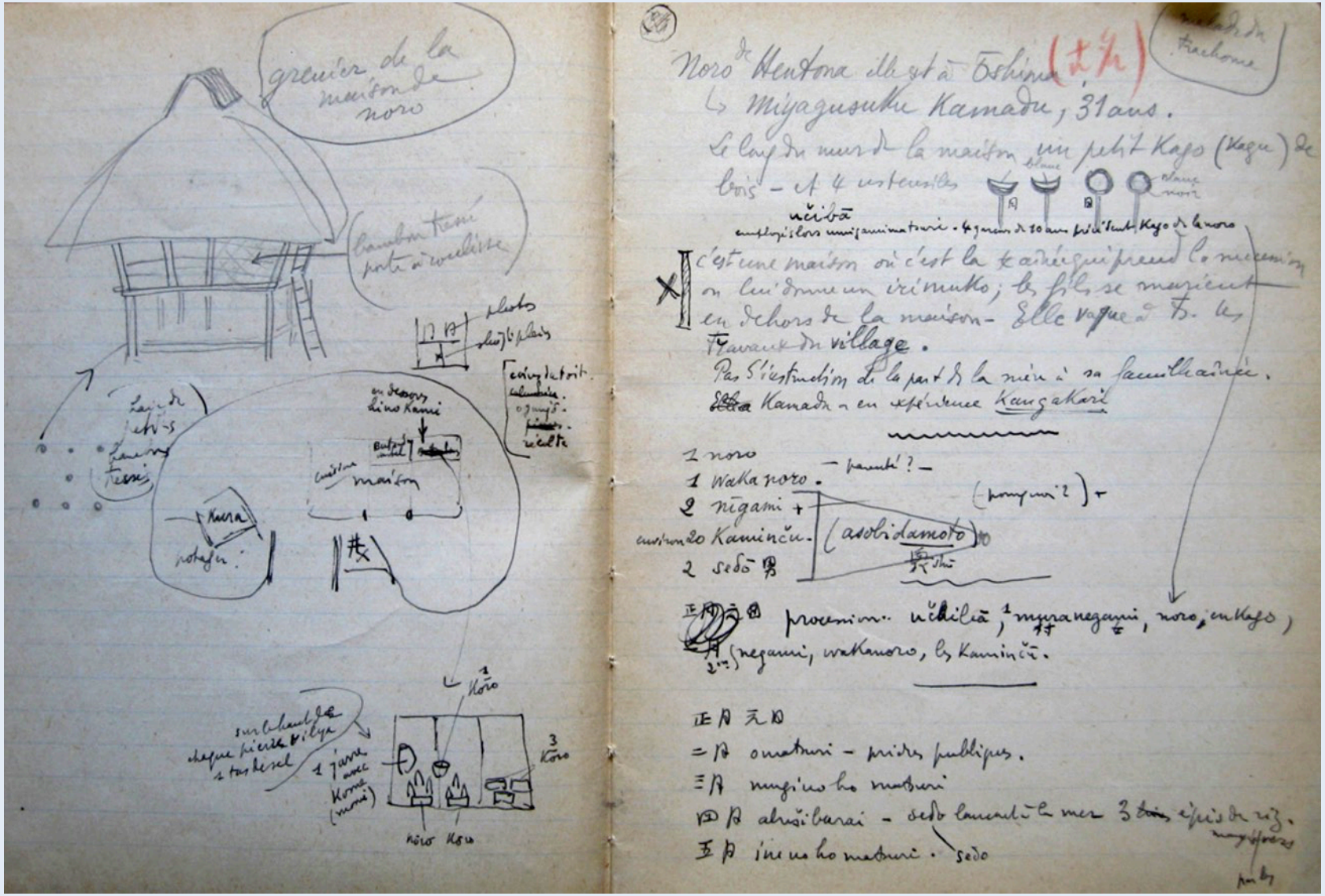
藁屋根の子供の墓

子供は両親の死以前
に亡くなったら仮の
茅葺屋根の墓に埋葬
される



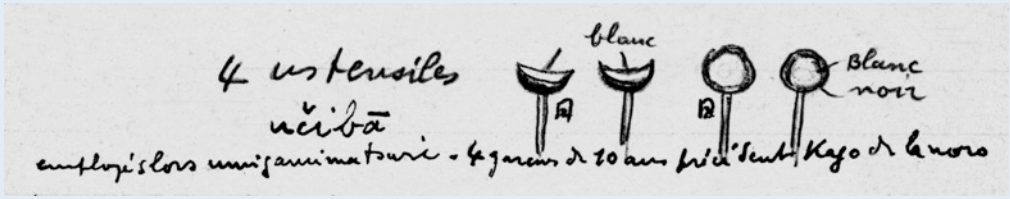
名護地方

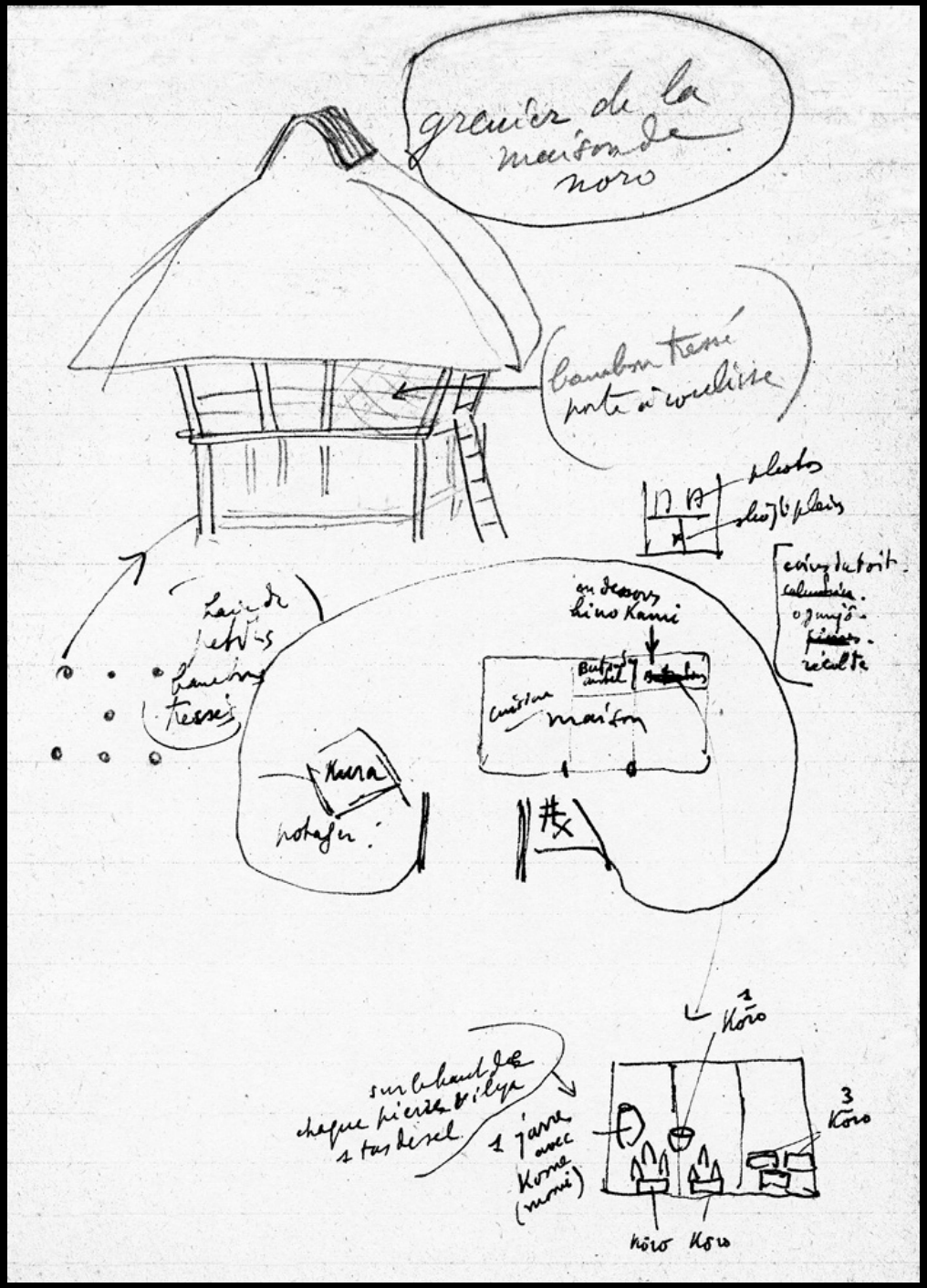




辺土名のノロ：31歳の宮城（みやぐすく）カマドゥ
祭祀組織・ウンジャミのウチバー

四人の10歳の少年がノロの籠の先頭に立って
白月形と白黒日形のウチバーを持つ　⇒

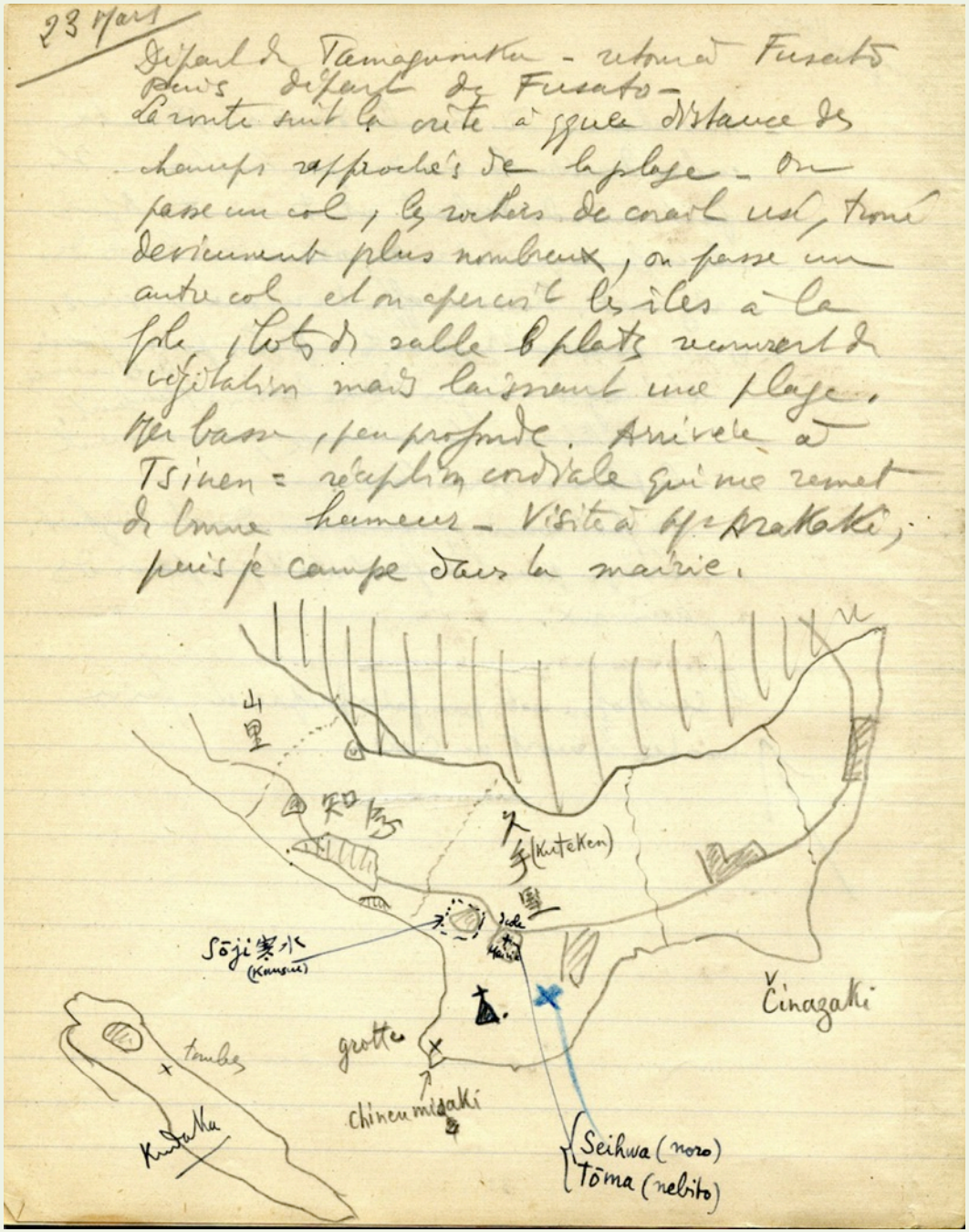




辺土名のノロの住宅

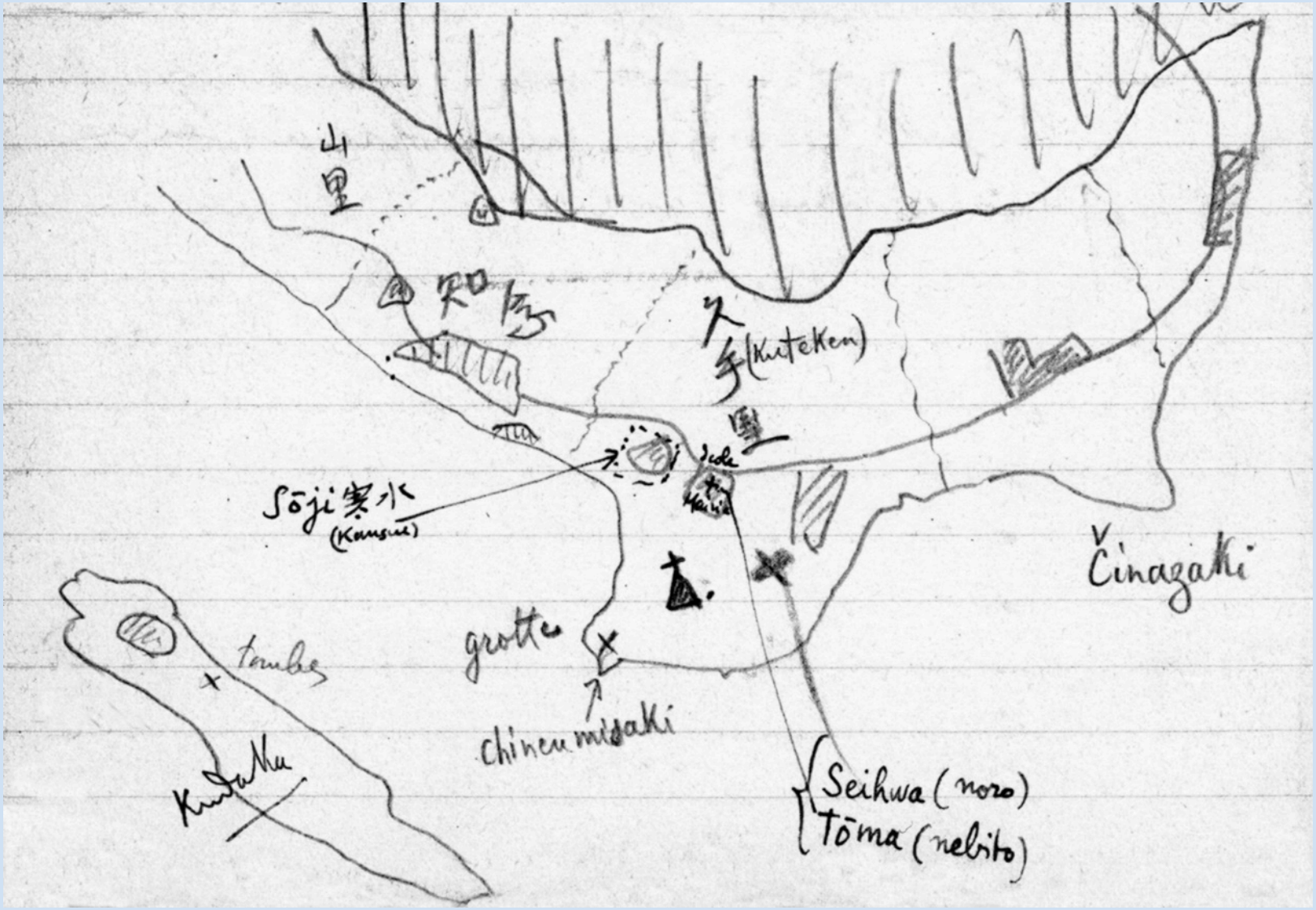
倉、仏壇、火神の香炉

知念半島



1930年3月23日

玉城・富里

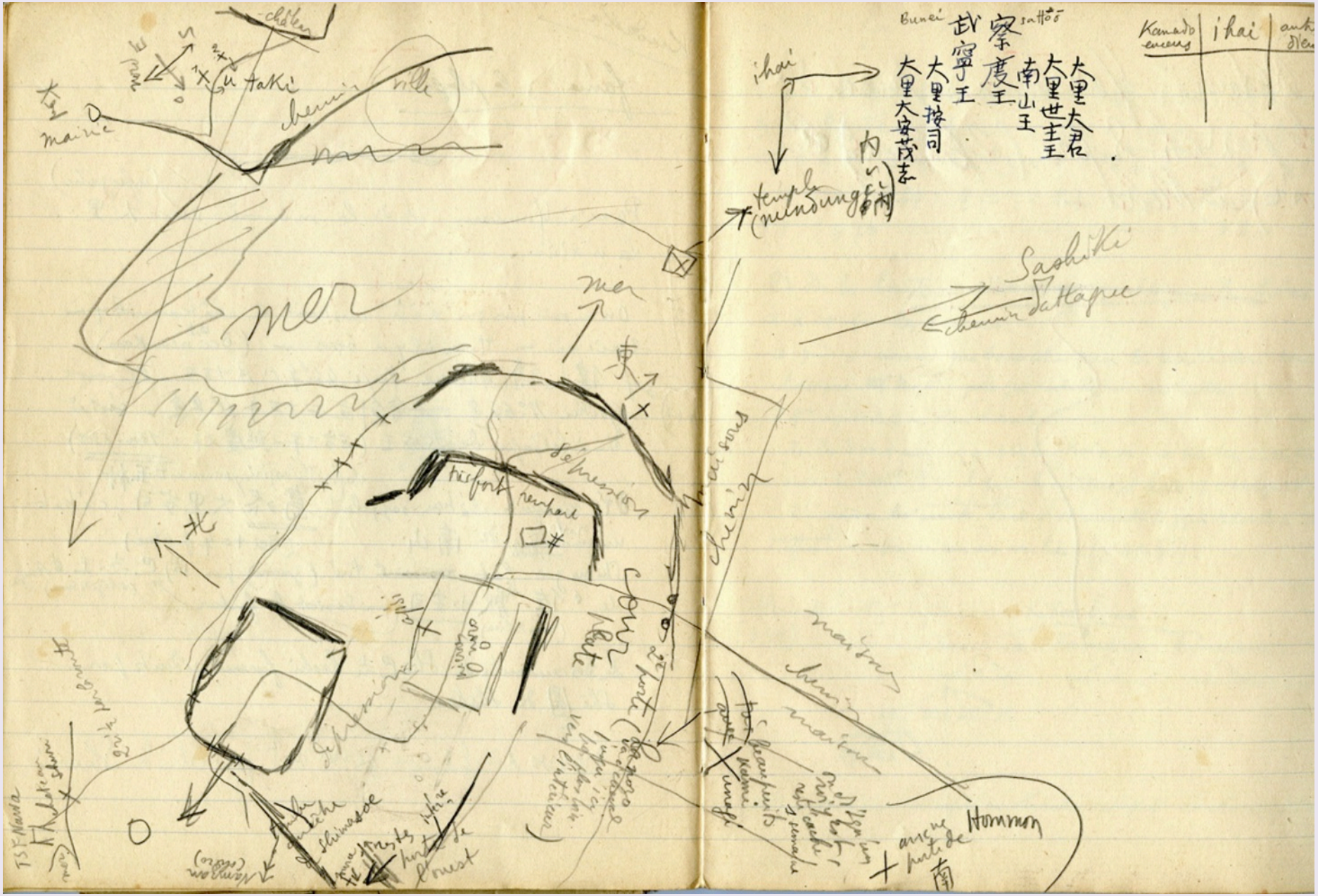


知念岬・知名崎・斎場御嶽・久高島

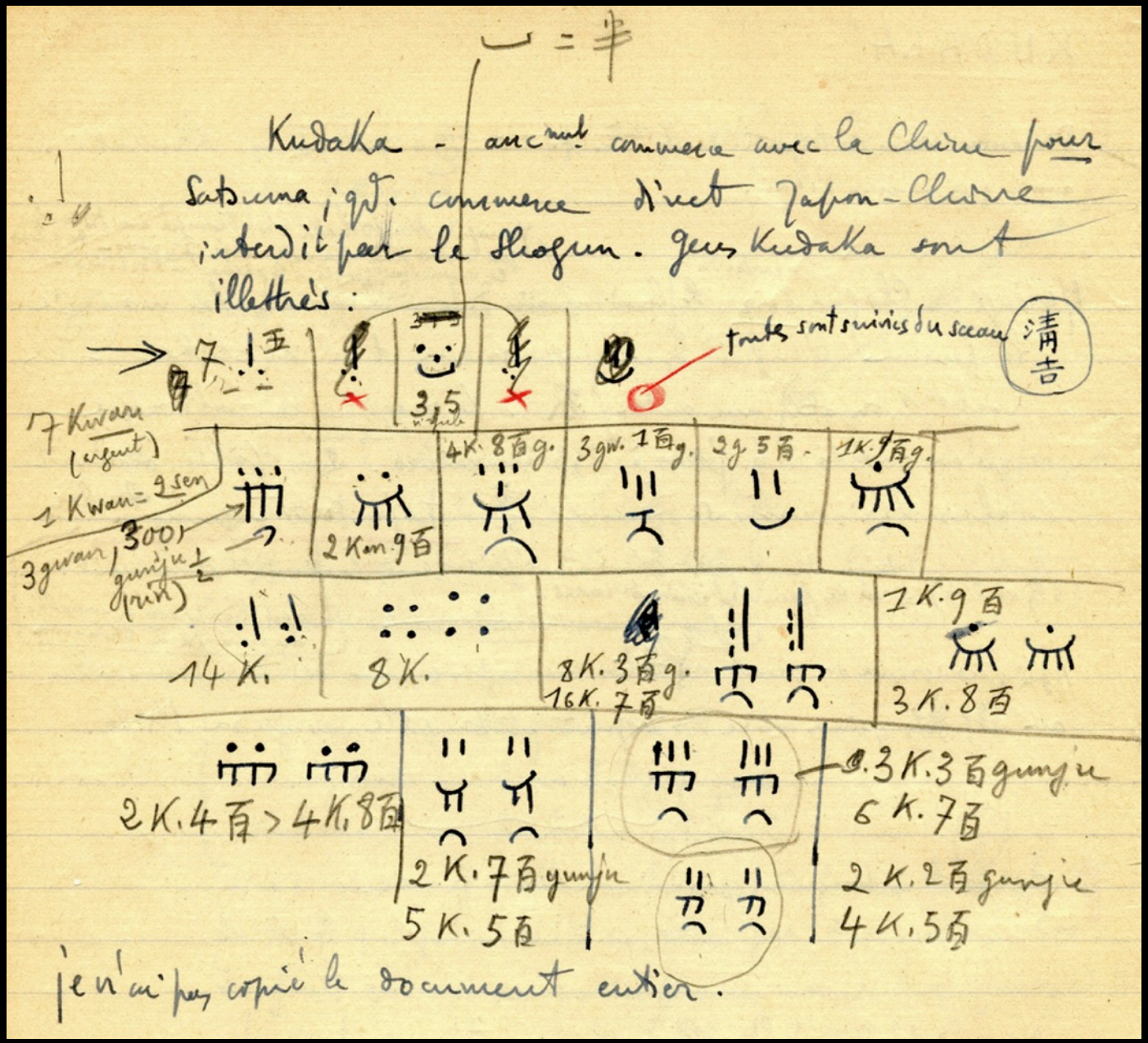
－　山里・久手堅・斎場=ノロ、当間=根人・学校・役場・掃除(寒水)・久高島の墓　－

久高島

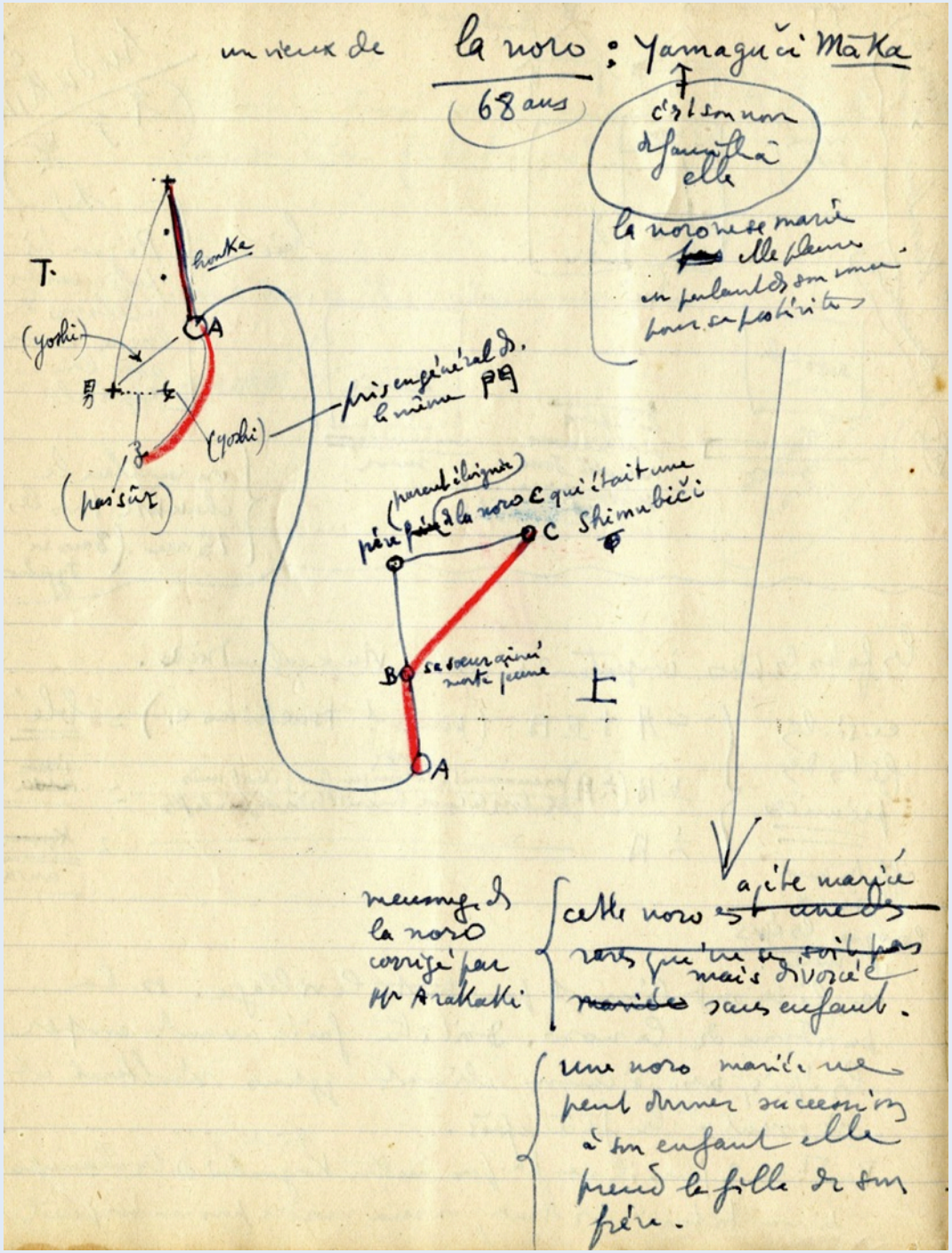
「それぞれの棺の上に下駄や傘が置いてある」


Bunei
武寧
Satto
察度
大里大君
大里世主
南山王
大里按司
大里大安茂志
ihai
temple
Sashiki
Sattapee
chemin
mer
東
北
南
Hommon
maison
chemin
Kamado
ihai

大里グスクの遺跡



久高島で貿易のための符号法

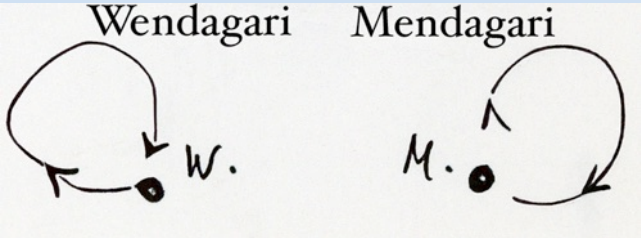


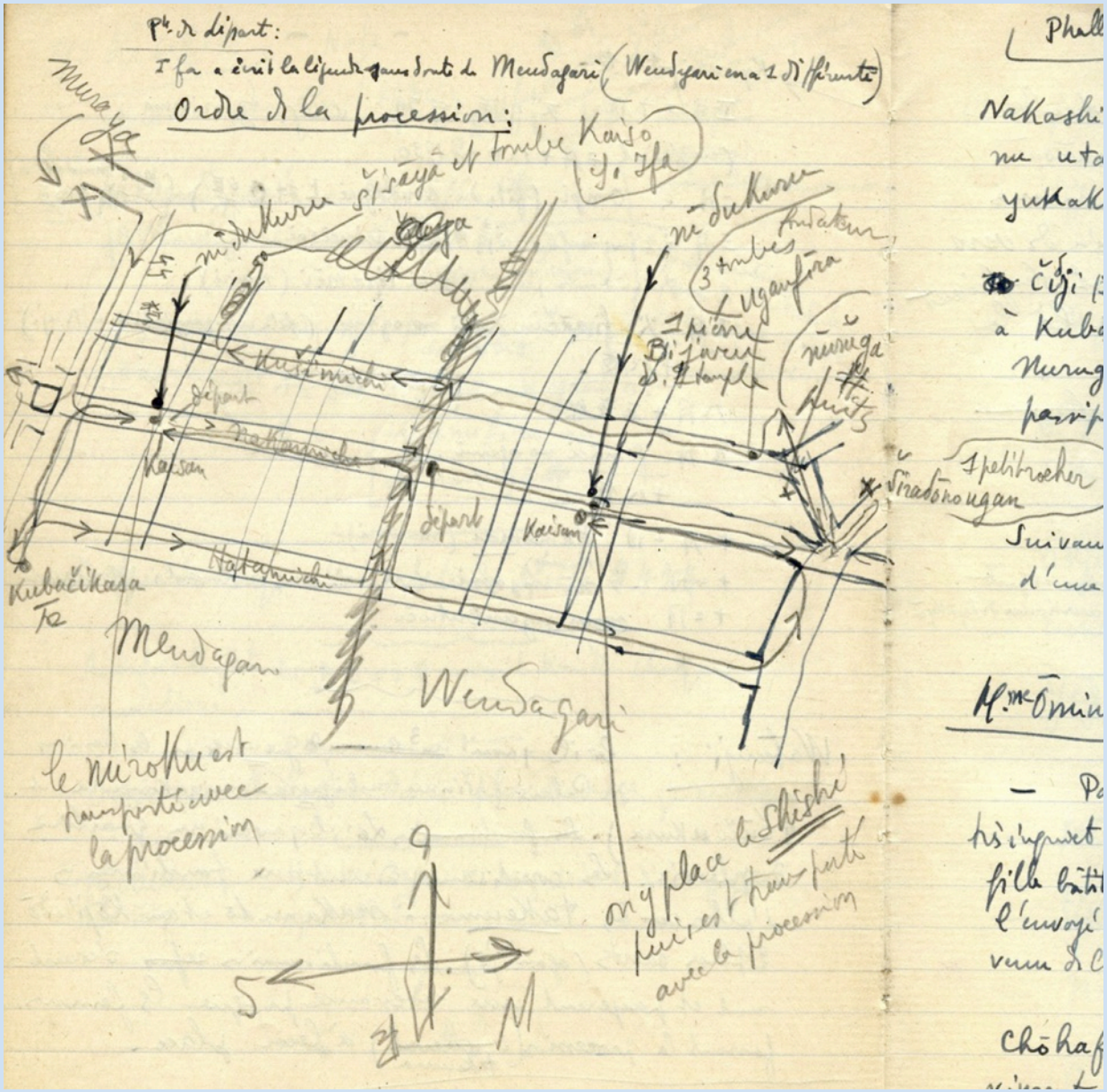
久手賢字

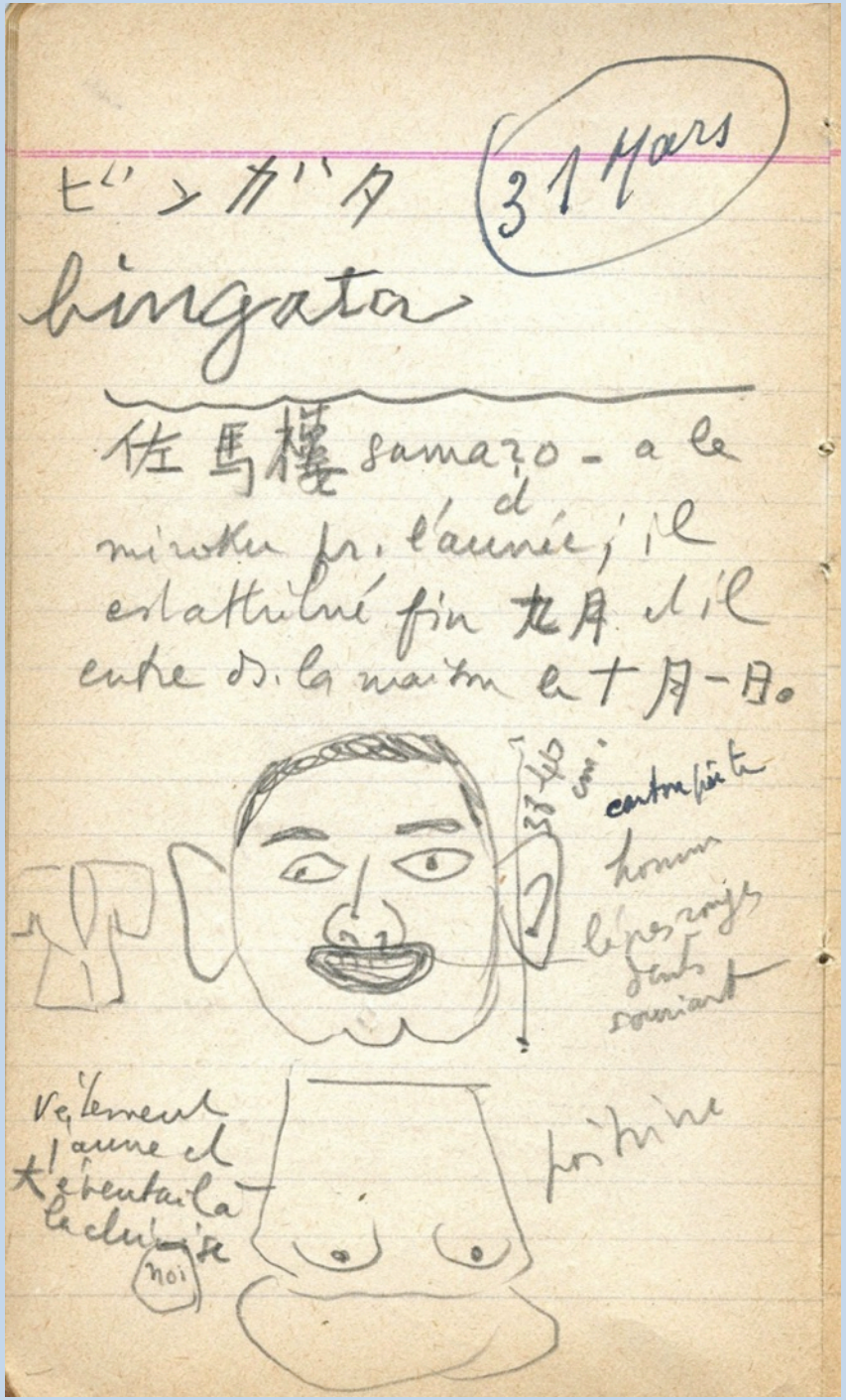
68歳の山口マーカノロ

ノロ職の継承系図

辻町のジュリ馬祭


Wendagari
Mendagari
W.
M.


Pl. de départ:
Ordre de la procession:
Kaisan
Départ
Mendagari
Wendagari
le miroku est transporté avec la procession
mon place le Shishi est transporté avec la procession



辻町はメーンダカリとウイーンダカリと言われた区域で構成され、ジュリンマ行列の際に、メーンダカリ区の住民が弥勒神像、ウイーンダカリの住民がシーサー（獅子）を運んだ。ウイーンダカリのシーサーは、円覚寺の弥勒のワカレと言われていた。

辻町の佐馬樓は一年間弥勒神を守る
それは九月の末に与えられて、十月一日
に住宅に入る

御清聴を感謝いたします

沖縄国際大学総合研究機構　南島文化研究所

第 24 回南島研セミナー

古代日本文化の鏡を越えて

～1930 年の沖縄に関する仏国のシャルル・アグノエルのフィールドワーク調査～

【概要】

1930 年、後のソルボンヌ大学の教授で、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究院の創設者であるシャルル・アグノエルが、東京の日仏会館の研究員であったこの時期、民俗学および言語学的調査を行うため沖縄へ赴いた。彼は南島談話会に集まった民俗学者たち、とりわけ伊波普猷と親交を持ち、自らのフィールドワークノート上で彼らの論文を頻繁に参照している。

しかしながら、彼のアプローチは日本の民俗学者のそれよりも体系的で、日本文化とはやや別個に沖縄文化の特性を考慮する傾向が窺える。本発表は、シャルル・アグノエルが沖縄から持ち帰ったノートやクロッキーの豊かさをあらゆる角度から紹介することを目指す。

講師：**パトリック・ベイヴェール**氏

（フランス科学研究庁　社会科学高等研究院・日本研究所教授）

日時：2012 年 10 月 29 日（月）　16 時 30 分～

会場：沖縄国際大学　13 号館 3 階　301 教室

～参加無料・申込不要～